



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

みんなで使おう! 学校図書館 Vol.15 :
「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データ
ベース」報告集

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学附属学校運営部 公開日: 2024-03-21 キーワード (Ja): ETYP:教育実践 キーワード (En): 作成者: 東京学芸大学学校図書館運営専門委員会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000299

みんなで使おう！学校図書館

VOL.15

「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」報告集



はじめに

インドの図書館学者ランガナタンは、『図書館学の五法則』で、「図書館は成長する有機体である」と述べています(1931年:森耕一監訳)。15年前に産声をあげたこの文部科学省事業と学校図書館活用データベースも、それ自体が生き物のごとく、ダイナミックに成長してきました。全国の授業づくりに役立ちたいという想いで制作に関わってくださった方々、使って下さった方々に心より御礼申し上げます。

これまでに他にも教育実践事例のデータベースが、数多く生まれては更新されず瞬く間に消えていきました。なぜ、学校図書館活用データベースが継続してきたのかについては次の3つの要因が考えられるでしょう。

まず、(1) データベースであってデータベースではない点です。データベースという用語から一般的に連想されるのは無機質な情報の集合体です。しかし、このデータベースからは、心がこもっていて、血の通った人間性を見出すことができます。単なる情報提供を超えて、学校図書館を愛し、本を愛する想いがたくさん詰まっています。そうだからこそ、見ていても楽しいし、役立つ実感を得られます。物体としての本ではなく、その内容を子供たちに心を込めて送り届ける感性がまさに反映されたデータベースとなっています。

つぎに、(2) 主題を生かした編集がされている点です。単なる断片的な情報の寄せ集めではありません。執筆者の教育観・授業観、図書への向き合い方などを見極め、ときには事前に十分に話し合ったうえで、筆者の魅力を最大限に生かす形でデータベースに掲載しています。そうであるからこそ、実際に役立つ居心地のよさを成り立たせています。質の高く誤りのない情報提供を目指した編集者たちの情熱と、訪れてくださった方々の気持ちとが、共感・共鳴し信頼し合って発展してきました。デジタル空間には無数の情報が秩序なしに漂っていますが、これとは異なり、主題に基づく体系的な編集がなされている1冊1冊の本や雑誌と日常的に接している専門的な感性が発揮されているといえるでしょう。

最後に、(3) 学校図書館の今と未来がダイレクトに伝わってくる点です。商業出版物と比べて、教育現場の生の実践が鮮度良く直ちに紹介できる身軽さがあります。ブログ・SNS・YouTubeと似た、発信者の息遣いが垣間見える実感が得られます。緻密な検証や完成度の高さだけを求めるのではなく、共に学ぶことに向けて、さらにより良いものを目指して、たとえ途中過程であったとしても、今のこの瞬間の実践をリアルに伝え提案することを重視しているからでしょう。その積み重ねが、より良い実践をさらに生み出し、未来を形作っていく基礎=ベースとなっています。

今後も学校図書館界は様々な荒波に揉まれるに違いありません。1974年に日本図書館協会は、図書館員の専門性として、利用者を知ること、資料を知ること、利用者と資料を結びつけることであると定義づけています。公共図書館よりも子供たちや教職員との対話が求められ、館内のすべての図書内容を熟知することも不可能ではない学校図書館だからこそ、この専門性を愚直に追い求めることで学校図書館の未来は開かれます。それに向けてこのデータベースがさらに活用され、皆さんに役立ち続けていくことを強く願っております。

令和6年2月
東京学芸大学教授
前田 稔

目次

はじめに	1
目次	2

【令和5年度の研究】

1. 本事業の目的	4
2. 実施内容	4
(1) 学校図書館を活用した授業実践	4
(2) 学校図書館の整備・活用に役立つ司書研修の企画・実施	4
(3) 「先生のための授業に役立つ学校図書館データベース」リニューアル	5
3. 事業成果の評価の方法	5
4. 調査研究の成果と課題	6
(1) 学校図書館を活用した授業実践	6
①東京学芸大学附属国際中等教育学校	6
②東京学芸大学附属特別支援学校	9
■事業委員による指導・助言	12
(2) 学校図書館の整備・活用に役立つ司書研修の企画・実施	14
(3) 「先生のための授業に役立つ学校図書館データベース」での発信	17
学校図書館活用データベースの意義と活用について	
東京学芸大学 学術情報課長 高橋菜奈子	20
新しくなる「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」	
合資会社 風夢 橋本健志	21
教材検索システム BookReach の開発と学校図書館活用データベースとの連携	
南山大学准教授 浅石卓真	22
座談会「学校図書館のミライ～データベース事業 15 周年を迎えて～」	23
寄稿：「変化をチャンスと捉えて」 専修大学文学部教授 野口武悟	37
「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」の 15 年	38

【資料】

■附属学校図書館データ一覧	42
■附属間相互貸借データ一覧	53
■活動の記録 ～会議等～	54
■日本教育大学協会学校図書館部門活動報告	55
おわりに	56
学校図書館運営専門委員会委員名簿	57
事業委員会・研究協力者一覧	58

【令和5年度の研究】

1. 本事業の目的

東京学芸大学では、附属学校運営参事、附属学校課長、各附属学校の司書教諭、司書、そして大学の学術情報課長、学術情報課学術企画係長を委員として、学校図書館運営専門委員会が構成されている。本委員会では、本学の全附属学校園の読書環境づくりと図書館活動について組織的に取り組むとともに、大学図書館や大学の研究事業との連携・協力も行ってきた。文部科学省委託事業に関しても、同様に、本委員会で協力して取り組み、本学教授及び他大学教授・元公立図書館関係者で構成する事業委員会による指導・助言を受けながら、実践・調査・研究を進めてきた。また、大学図書館とも、月に4回巡回している附属学校園への連絡便を利用した相互貸借など、協力体制を構築している。

附属幼稚園及び附属特別支援学校を除き、専任の学校司書が常駐する附属学校では、児童・生徒の読書環境が整えられている。機能する学校図書館が、「社会に開かれた教育課程」を打ち出した新しい学習指導要領のもと、どのような学習支援を行うことができるのか、率先して発信していく役割が求められている。教員も、学習指導要領等を踏まえ、各教科等において学校図書館の機能を計画的に活用することや、各教科を横断的にとらえることが求められている。

平成21年から、文部科学省事業の一環として『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』の運営を行ってきたが、教員養成系大学の附属学校からの発信は、現役の教員だけでなく、教員をめざす学生にとっても有益な情報源となっている。GIGAスクール構想のもと、今後ますます情報活用能力の育成が重要となってくる。それに応えられる学校図書館の環境整備と支援の在り方を検討するとともに、学校司書のスキルアップをめざす。

2. 実施内容

(1) 学校図書館を活用した授業実践

学校図書館を活用した今日的な課題(SDGs 知的財産権 探究等)の授業案とブックリスト等の提供。小・中・中高一貫・高校・特別支援学校に於いて、実際に授業を行った。その際、図書・雑誌・新聞・電子書籍・有料データベース・インターネットサイトなど、できるだけ多様なメディアが選べる場として図書館を活用した。事例化するにあたり、指導案・ワークシート等に加えて、授業との連携を主軸としたブックリスト等(含む デジタルパスファインダー)の提供を目指した。(各校の実践は、p.17を参照)

12月16日に開催した「令和5年度文科省事業報告会～みんなで作ろう！学校図書館VOL.15」では、次の2校の授業実践報告が行われ、本事業委員の先生方から指導・助言・講評をいただいた。

① 附属国際中等教育学校

「理科と美術科の教科横断的な学習の試み～学校図書館がつなげる学年を越えた学びの場の創出～」

② 附属特別支援学校

「特別支援学校における図書活用～小学部を中心に～」

(2) 学校図書館の整備・活用に役立つ司書研修の企画・実施

夏の研修会を対面で実施するか、オンラインで実施するかを検討したが、遠方に住む方々からオンラインでの実施の要望が多かったため、今回もオンラインでの実施とした。ただし、研修を実施する側は、東京学芸大学附属図書館のラーニングコモンズを会場として、講師・スタッフが集合して開催した。

1日目は学校図書館図書の購入促進の前提として、自館の蔵書をどのように構築していくか、またそのための選書・廃棄について、教員の立場から清教学園の片岡 則夫氏に研修講師を依頼した。後半は、小学

校の蔵書構築をテーマに、附属小金井小学校の前学校司書 中山 美由紀氏と現学校司書 松岡 みどりにお話を伺った。

2日目は、東京学芸大学附属図書館 学術情報課長(併) 情報基盤課長 高橋 菜奈子氏に講師を依頼し、授業で使えるデジタルアーカイブについて学んだ。また実際の授業での活用について成城学園初等学校教諭 宮田 論志氏と附属竹早中学校国語科教諭 菊地 圭子氏、ならびに同学校司書 中村 誠子からお話を伺った。

実施後、9月末までの期限付きで録画配信も行い、参加者にはアンケートへの記述を依頼した。

(3) 「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」リニューアル

各附属学校の授業実践は、データベースにアップし、研修に関しては、当日参加できなかった方に向けて9月末までの動画配信を行った。15年目に入ったWebサイトのリニューアルに関しては、オンラインでの打ち合わせを行い、現在作業を継続中である。次年度以降は、他の機関とのさらなる連携や、デジタルアーカイブなどの新しい「学習材」も反映できるWebサイトをめざしている。

3. 事業成果の評価の方法

(1) 学校図書館を活用した授業実践

実践報告を行った2校だけでなく、今年度もすべての学校が事例を提供することができた。学習に役立つデジタルコンテンツに関しては、「学校図書館の日常」レファレンスで紹介をした。今年度の委託事業は、「学校図書館の活用(研修の内容等)に理解が深まった教職員(研修参加者)の増加」が評価指標となっていた。そこで東京学芸大学で前田稔教授の「情報メディアの活用」を受講している学生約70名に、今回の報告会を視聴してもらい、そのレポートを分析した。その結果2つの授業実践に対し、その有効性を高く評価し、学校図書館活用への理解が深まったことが読み取れた。大学生の多くが、これから教員として活躍することを思うと、教員志望の多くの大学生に、報告会を視聴してもらう意義を実感した。事業委員の先生方からの講評(p.12、13)も、2校の授業実践を丁寧に解説していただき、これからの学校図書館のあり方に多くの示唆をいただいた。

(2) 学校図書館の整備・活用に役立つ司書研修の企画・実施

研修に関しては、実施後のアンケートに評価指標だけでなく、自由記述欄を設け、有効性について分析した。それをもとに、12月16日の文科省事業報告会で、司書部会より報告をした。

(3) 「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」リニューアル

令和6年3月を目標に、リニューアルの作業を行っているが、現データベースも止めることなく、発信を続けることができたので、サイトへのアクセス数の推移や、授業実践数、各コンテンツの記事数などもカウントしてまとめることが出来た。予定していたアンケートは、リニューアル作業が若干遅れているため、次年度以降に行いたい。

4. 調査研究の成果と課題

(1) 学校図書館を活用した授業実践

理科と美術科の教科横断的な学習の試み ～学校図書館がつなげる学年を超えた学びの場の創出～

東京学芸大学附属国際中等教育学校 川上佑美（理科）・渡邊有理子（学校司書）

1. 本校における学校図書館の役割と現状

(1) 本校の特色と学校図書館の位置づけ

本校は、国際バカロレア（IB）校であり、1～4学年の全員を対象とした中等教育プログラム（MYP）、5・6学年の1割程度を対象としたディプロマ・プログラム（DP）を実施している。IB校では学校図書館について「図書館マルチメディア、およびリソースがプログラムの実施において中心的役割を果たすこと」が求められている。このため司書は、授業に必要な資料を用意したり、教科と連携をして講話を行ったり、授業後には生徒の成果物を館内に展示したりしている（写真1、2）。

また、生徒全体（約730名）の約40%が帰国生徒または外国籍の生徒である。IBでは生徒への母語支援を推奨していることから、全校生徒への母語支援アンケートを実施し、現在32か国語となった書籍は「多言語コーナー」に排架している（写真3）。また、多言語のコンテンツやオーディオブックが利用できる電子図書館を開設したことにより、文字情報よりも聴覚情報のほうが母語を理解しやすい生徒にも活用されはじめた。

(2) 学校図書館の授業等での活用と支援

本校では、学校図書館において授業をすることは特別なことではなく、日常的に行われている。2021年度は11教科で265時間、2022年度は10教科で389時間の館内授業が行われた。館内中央は広く授業スペースとなっており、座学だけではなく、輪になってディスカッションをするなど、その活用方法は多岐にわたる。また、授業以外での活用として、学年集会や保護者会、生徒有志の企画展、サイエンスカフェなどが挙げられる。



写真1 輪になってディスカッション



写真2 成果物の展示例
(高2 英語で絵本をつくる)



写真3 多言語コーナー



写真4 キャラクター作品

2. 理科と美術科をつなぐ単元設計

(1) 教科横断的な学習を導く視点

中学校第一学年理科「(1)いろいろな生物とその共通点 (イ)生物の体の共通点と相違点 ④動物の体の共通点と相違点」において、美術科と連携した単元を設計した。単元設計にあたって、既存の分類の理解だけをゴールにするのではなく、動物について知りたいと思える動機をもてるようにしたいこと、多様性と共通性を見いだせるほどに多くの動物について生徒に知ってほしいことの2点を重視した。そこで、美術科と連携したキャラクターデザインを行うことを試みた（写真4）。

理科は、観察し、生物を科学として理解すること、生態を考察することは得意である。一方、創造性の余地は少なく、ある意味では答えがあると

いえる。美術科では創造性を発揮できる一方、生物を科学として理解し、生態を考察することは苦手である。世界で愛されるキャラクターは科学の知識に基づいてデザインされている。理科と美術科が連携することで、科学をすることだけが科学の学びではなく、生涯にわたって科学を面白がれるための視点を取り入れられると考えた。

授業内で扱える動物の種類には、物理的・時間的な制約が大きい。実物の観察ではなくとも、図書を活用することで、多くの動物について知ることができる。図書は信頼しうる情報にアクセスしやすく、知らない情報に出会い、視野を広げやすいツールである。ただし、図書は最新の情報や鳴き声や動きなどのデジタルデータには弱い。情報ツールの特徴を踏まえて、活用できるようにしたいと考えた。

(2) 理科からみた図書活用

理科と美術科の連携は、同時期に授業を実施するのではなく、リレーのバトンを渡すように時期をずらして実施した(図1)。

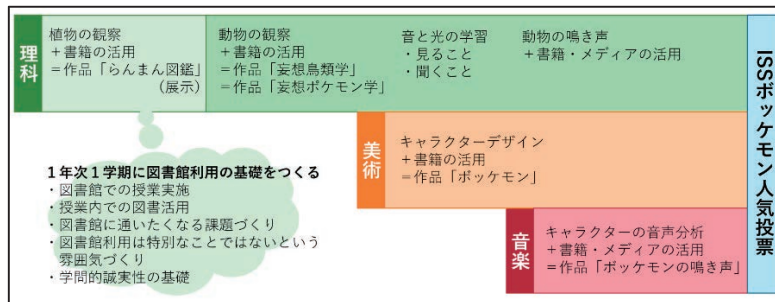


図1 連携のタイミングと概要

リレーのバトン型で連携する場合、継続して図書館連携をすることによって、生徒の学びの深化・促進が期待できる。教科の授業だけではカバーしきれない知の広がりを生むこととなり、図書が生徒の学びの伴走者となっていると言える。

理科の授業内では、「妄想鳥類学(写真5)」や「妄想ポケモン学(写真6)」において特に図書館との連携を図った。「妄想鳥類学」は、既存のキャラクターの外見的特徴を実際の動物と比較し、生態を妄想するグループ課題である。正解がない問いに対し、図書を活用しながら、根拠のある主張をすることを目標とした。「妄想ポケモン学」は、妄想鳥類学での学習を生かした個人課題である。生徒は自分が好きなキャラクターを選ぶため、より多様な図書を参照し、課題に取り組むこととなる。

(3) 司書からみた授業支援

授業支援に必要な資料を用意するうえで、教員への聞き取りはとても重要である。しかし限られた時間で詳細に聞き取ることは難しく、初期段階で確認することは、集める資料のキーワード、授業開始の時期、使用期間、館内での使用か教室に移動させて使用か、複数教科の連携の場合の

注)「ポケモン」は任天堂(株)の商標または登録商標です。普通名称ではありません。



写真5 妄想鳥類学

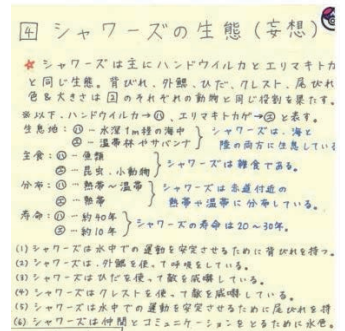


写真6 妄想ポケモン学



写真7 カートでの資料提供

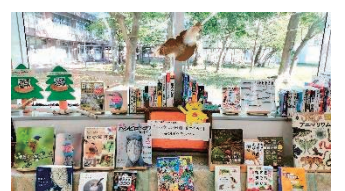


写真8 館内での資料提供



写真9 骨格関連の資料

連携のタイミング、授業後に生徒の成果物を展示するか等である。

授業連携をする教員とはグループチャットに司書も加わり、生徒に配布した資料の共有や、初期段階では聞き取れなかった事項の確認をしながら、提供する図書を加えていった。理科の授業では教室で図書を使えるように、カートに脊椎動物に関する図書を分類して並べ、移動可能な状態で提供した（写真7）。2学期に美術の授業が始まると、カートの図書を館内で展示し（写真8）、特に生徒が造形物の参考として求めていた骨格関係の資料を目につくように面展示をした（写真9）。さらに3学期の音楽科との連携を見据え、動物の鳴き声を聞くことのできるサイトをQRコードで提供した（写真10）。



写真10 QRコード資料

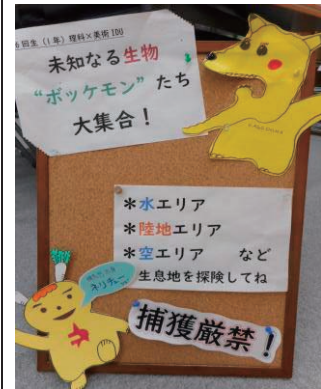


写真11 成果物の展示案内



写真12 成果物の展示
(空エリア)



写真13 成果物の展示
(海エリア)



写真14 人気投票案内

3. 学校図書館がつなげる学年を超えた学びの場の創出

(1) 成果物「ポケモン」の展示

生徒の成果物を展示する際は、まず教員からの要望を聞いている。理科からは館内のあちらこちらに展示してほしいことと、シカの腰骨や学校で見つかった鳥の巣なども一緒に展示してほしいとのことであった。そのため、「未知なる生物大集合！」と銘打ち（写真11）、理科での考察と美術科での創造という一連の流れが違和感なく成果物の展示につながることを意識して空間づくり（陸エリア、空エリア、海エリア）を行った（写真12、13）。図書館では「多様性を認め合う空間」をコンセプトに、学年単位のつながりに留まらず、6学年がタテにつながることを意識して運営している。今回の展示は、まさに学年を越えて関心が寄せられ、交流につながる展示となった。

(2) 「ISS ポケモン人気投票」の実施

ポケモンの人気投票を、全校生徒および教職員を対象に、館内展示のQRコードよりFormsを用いて行った（写真14）。評価活動と切り離して人気投票を行うことで、自分たちの学びを楽しむことができ、学年や教科を超えた学習の刺激を生むことができる。投票した生徒は「この課題僕もやりたかった。（6年生）」「全体的に構想が練られていてすごかった。（5年生）」と回答している。図書館の展示を通して、学年を超えた学びの場の創出ができていると言える。

4. 教科教育を支える図書館連携

教科等横断的な学習が求められている。各教科の学習を保障しつつ、教科等横断的な学習をするための方法の一つとして、図書館連携がある。学びは授業内だけで行われるものではない。教科教育だけではカバーできない知と出会い、生涯学び続ける人を育成するためには、教科と図書館が連携し、生徒の学びの伴走者になることが必要なのではないだろうか。

特別支援学校における図書活用 ～小学部を中心に～

東京学芸大学附属特別支援学校 小学部教諭 堀田 椋

1. 附属特別支援学校小学部における図書環境の現状

附属特別支援学校には、独立した学校図書館がないものの、各学部に図書コーナーがあり、小学部の図書コーナーは、児童の使いやすい教室近くに設置し、逆ブラウン式による貸出方式で本の貸出しを行っている。各児童は読みたい図書からブックカードを取り、自分の貸出ポケットにブックカードを入れることによって図書を借りることができる。

他方で、小学校学習指導要領において学校図書館を計画的に利用することや学習活動および読書活動を充実することが求められている。学校図書館を活用した授業展開の可能性を考えると、本校では実現できていない学校図書館に常駐する学校司書との図書を介したコミュニケーションや、独立した図書館の存在というのは重要な意義を有すると考える。

2. 附属特別支援学校における図書活用の実践

附属特別支援学校における図書活用の実践については、①絵本集会、②遊び、③公立図書館、④バリアフリー資料について述べる。

1) 絵本集会

附属特別支援学校では、小学部内で年に12回設定されている全体授業の中の一つである「集会」という授業がある。その中で「絵本集会」が位置づけられており、さまざまな絵本に触れることで、お話の世界観を楽しむといった目的で構成されている。今年度の絵本集会は、小学部各学級による発表と司書による発表の計4つの発表を行った。

これまでの絵本集会における読み聞かせの形式に焦点を当てると、一般的な読み聞かせ形式、拡大図書のような読み聞かせ形式、デージー図書のような読み聞かせ形式がある。一般的な読み聞かせ形式は、紙の絵本を教員が直接読み聞かせをする形式であり、利点としては、即興的に読み方や読むスピードなど、目の前の児童に合わせて柔軟に変更することができる。一方で、読み手の読み聞かせに関する経験や能力によって左右されてしまう側面もあると考える。次に、拡大図書のような読み聞かせ形式は、大型電子黒板に大きく絵本を写す形式であり、利点としては、画面が大きく写せるので視認性が高く、読み手の手が自由になるため、写真2のように手遊び等、自由な読み聞かせができる。一方で、紙の書籍のように即時に特定のページに進んだり戻ったりすることが難しい点があると考えられる。

過去には、絵本をセリフやBGMを入れて、大型電子黒板に映すといった読み聞かせを行った。デージー図書のような形式で、著作権法37条3項により絵本の電子化が可能となり、絵本のセリフを担当が言ったのを録音したものや様々な音源をBGMおよび効果音としてタブレット端末や電子黒板等で再生することができるように作成したものである。利点としては、臨場感溢れる読



写真1: 一般的な読み聞かせの様子



写真2: 拡大図書のような読み聞かせの様子

み聞かせができる点であり、親しみのある担任の声だと安心するといった児童の実態に応じた音源等の変更ができる点である。録音や効果音等と絵本を合わせることに一定の時間が必要となるが、繰り返し使用できるよさもある。このように絵本集会では、様々な読み聞かせ形式を取り入れることによって、障害のある児童でもそれぞれに合った絵本に出会い、物語の世界観を楽しむことができると考える。

2) 遊び

遊びについては、スイカの遊び道具の例を挙げたい。過去にスイカの遊び道具を作って遊びに取り入れた際、ある児童が学級内の本棚から以前読み聞かせをしたスイカに関する絵本を取り出し、比較する様子が見られた。この姿から、調べ学習の前段階として気になったものを参照している姿と捉えることもできる。このことから、遊びの道具と絵本との関係性が知識等を深めるための重要な視点であり、小学部段階では遊びや遊び道具などを通じた経験と絵本との関係性を構築できるよう意識していくことが教員に求められると考える。



図1: 遊び道具と絵本を比較する様子

3) 公立図書館

小学部では、「でかけよう」という地域で暮らすための基礎的な知識や技能、態度を育てることを目的とした授業がある。「でかけよう」では、学校近くのスーパーマーケットで買い物学習をしたり、公園へ行ったりし、その中で東久留米市の東部図書館の利用が挙げられる。実際に利用者カードを作成し、自分の好きな本を借りてみるといった活動が設定されており、このことは児童らの余暇支援へとつながると考える。また、公立図書館の貸し出しシステムは、どの都道府県においても同様のシステムであり、将来的な公立図書館利用の可能性が高く、汎用性が高くなると考えられる。

4) バリアフリー資料

今回、低学年学級の児童に LL ブックやマルチメディアデージーなどのバリアフリー資料を読む機会を設けることができ、各児童によるバリアフリー資料の読み方や楽しみ方に違いを見ることができた。4枚の写真でストーリーが構成されている LL ブックでは、楽しむ児童がいた一方で、4枚の写真からその前後関係を理解することが求められる。また、マルチメディアデージーでは、話し手の速度が変えられるものの、紙の書籍のように自分のペースで読むことがしにくい面もあり、途中で読むのに飽きてしまう児童もいた。以上のように、文字が少なく視覚的に理解しやすいものが多いバリアフリー資料であるが、前述した絵本集会のように、障害のある児童らに対して様々な形式の図書を用意し、それを提供することで各児童に応じた読書環境を整えることができると考える。

3. 附属特別支援学校における図書活用のまとめと課題

特別支援学校の児童らが有する困難さは一人ひとり違う。それと同様に各児童に応じた図書との関わりが求められる。これまで述べてきたことを踏まえて、マルチメディアデージー等の様々な形式の図書の特性を教員が知ること、それを読書に困難さを有する児童一人ひとりに向けてどのように活用していくのかが重要となってくると考える。今後の課題としては、バリアフリー資料等、様々な形式の図書の特性を理解し、それをどのように実践に活かしていくのか検討していきたい。また、知的障害を含め、読書に困難さを有する児童らにどの図書形式が適しているのか、各児童一人ひとりと図書そのものに向き合いながら進めていきたい。

附属特別支援学校の学校図書館と司書のはたらき

東京学芸大学附属特別支援学校 学校司書 宮崎 伊豆美

はじめに

附属特別支援学校は、幼稚部から高等部まで、知的障害を有する子どもたち 70 名ほどの小さな学校である。独立した学校図書館の部屋はないが、各部に「図書コーナー」を設けており、子どもたちの実態に即した利用がされている。

幼稚部は職員室に、小学部は教室近くのスペースに、中学部はランチルーム、高等部は進路指導室と廊下に、それぞれ書架があるが、残念ながら子どもたちが手に取りやすい場所ばかりではない。中学部は、教室前の廊下にも定期的にテーマを変えて図書を並べており、そこはよく手に取られている。

学校司書のはたらき

学校司書の活動は、15 年前におはなし会のボランティアに来ていた前任の司書が、各部の図書コーナーを整備し、だんだんに学校図書館の活動を校内に広めていくことから始まった。今年度は月 1～2 回の勤務の予算を、研究費によって捻出している。

司書として大事にしていることは、司書がいないときも、学校図書館として図書資料が気持ちよく使えるようになっていることである。そのために、勤務日には、各部の図書コーナーを回り、ほこりを払い、季節の本を並べたり、季節の飾りつけをしたり、壊れている本を修理したりして、整備をしている。

特別支援の子どもたちにも使いやすいバリアフリー資料として、LL ブック、マルチメディアデジ図書、布絵本の整備もしている。マルチメディアデジ図書は、伊藤忠商事から無償提供される「わいわい文庫」を、ポスター等で周知を図っていたが、専用のパソコンもない状況では、なかなか利用は広まらなかった。貸出しもできるようにしているが、ディスクのままでは使いづらいため、教員に紹介し、教員のパソコンから必要な生徒の端末に入れてもらうことで少しずつ使用できるようになった。さらに広く使ってもらうため、ダウンロードの形で使用できる、国立国会図書館の「視覚障害者等データ送信サービス」の受信館登録を進めている。

また、(株)カーリルの学校図書館支援プログラムに参加することで、蔵書の検索ができるようになった。図書便りなどでお知らせして、利用してもらっている。

授業支援としては、まず、授業のテーマや要望に合わせた資料提供がある。小中高各部の校外学習にあわせた資料収集は、毎年公共図書館や、ほかの附属学校との学校連絡便を利用して行っている。中学部では、毎年総合学習の導入授業を支援している。司書から、調べ方の基本を学ぶ演習や資料案内を行っている。小学部では、クラスでの読み聞かせや本の紹介のほか、年に一回行われる絵本集会に参加している。生活のなかで絵本が使われる場面がたくさんあるので、機会をとらえてぴったりの本を届けていきたい。

このように、特別支援学校では、図書の必要な様々な活動があるが、残念ながら質および量ともに十分とは言えない。新しい図書資料の購入予算、アクセスしやすい図書コーナー、学校図書館として機能できる環境の充実、それを担うべき学校司書の勤務時間の確保など、課題はたくさんあるが、少しずつ前進していきたい。



■事業委員による指導・助言

附属国際中等教育学校の授業実践 講評

帝京大学教育学部教授 鎌田 和宏

- 国際バカロレアのカリキュラムを位置付けている学校として、横断的・総合的・探究的な学校風土をつくっている。これからの学校教育の希望となる実践を示してくれるのではないかな。
- IB 教育において学校図書館は必須の存在。日本の近代教育はコンパクトに展開し短期間に優れた成果を挙げてきたが、それではカバーできない時代・局面に入ってきているというのは以前から言われている。教科書に書かれていることを知識の体系として教えていくだけではこれからの社会で子どもたちはやっていけない。国際バカロレアのカリキュラムはそこに正対している。急激に変化する社会を前提にして、探究的な学習が重視され、学際的・総合的なテーマを学ぶことになっている。大人がそのように育ってきていないので教育観・授業観をシフトしていくことは難しいが、国際中等では学校ぐるみでやっている。そのような教育を実践していく中で、多様で新しい様々なリソースを提供できる学校図書館が果たす役割は大きい。
- 学校図書館スタッフには3つの役割があると言われている。その3つの支援を国際中等でもきちんと行っている。教育指導への支援に関する職務である授業支援、多言語図書を取り入れるという間接的支援、学びの交差点を創るという直接的支援という3つの側面。授業支援の中でみられる働きはヒドゥンカリキュラムの役割も担っている。
- 一般に、市民としての科学的素養に問題があると言われている。学校の理科で勉強したことを活かして市民生活を送れているかということは疑わしい。さらに今年は生成型 AI がトレンドワードになっている。その中で理科の面では科学的教養が高まる、美術の面では創造性を養うという授業になっているかというところに着目した。
- 「知りたいと思える動機を持てるようにする」ということは素晴らしく、AI 時代の教育実践で大切にしたいことである。理科が得意・苦手としていることとして挙げられた「答えが決まってしまう」などのことはどの教科にも言えることではないかな。
- 中高では横断的な学びは実現しづらいと言われている。本日の発表のように先生が共通の基盤として何を持っているかということを中心に共有し、並行的に展開していくことで生徒の中で総合されていく、ということが一つの答えとなりうる。
- 授業の展開に合わせて生徒の問題意識が発展していく、それに合わせて図書館でも資料の提示の仕方を変えるということが巧みである。
- 「妄想」という言葉が素晴らしい。遊びと学びと創造をつないでいる。
- 成果物の展示の仕方の工夫も素晴らしいが、この子どもたちなら VR 空間でもできるのではないかな。
- 教科だけではできない、学習センター、情報センターとしての学校図書館という学びのインフラがあってこそその学びであった。
- 学校生活の学びだけでは生きていけないという社会において、学び続けることの大切さを伝える授業に大きな価値がある。このような取り組みが広がってほしい。

特別支援学校では学校教育法の規定により、文部科学省検定教科書が適当でない場合は、他の適切な図書を用いることができるとあり、様々な図書資料が利用できる環境が非常に重要である。学大附属特別支援の学校図書館では、学校司書の勤務日数や予算の制約のある中で、司書教諭との連携のもと、着実に図書館の環境整備を進めてきた。独立した部屋があるわけではないが、着実に授業実践に活かし、学びや読書活動の充実を図ってきたことが重要なポイントである。

堀田先生の発表実践について

まず公共図書館の利用について、障害のある方々の生涯に渡っての豊かな学び、余暇の充実、学習指導要領にもある。その点から小学部の児童のうちから地域の公共図書館を利用できるように指導することはとても重要なことである。特別支援学校卒業後のデータを見ても、障害を持つ人の地域の公共図書館の利用は多く、まさに生涯学習の学びの場、読書活動の場となっている。ぜひ他校でも堀田先生の実践に学んで公共図書館利用を深めて欲しい。

絵本に音声や音楽をつけ子どもたちも楽しめるようにする実践については、著作権法第37条3項により、特別な支援の必要な子どもたちのためであれば既存の図書資料を著作権者に無許諾で音声化、デジタル化等の複製や公衆送信も可能となった。2019年から施行されているが、残念ながらあまり認知度が高くない。この規定をぜひ活用してほしい。この規定は学校全体としてではなく、学校図書館ができるという点が重要で、独立した学校図書館がないという学校でも、校務分掌として図書担当があればOKで、学校図書館での所蔵、他校との共有や公衆送信もでき、そのガイドラインも作られている。これらを推進すべく文部科学省では、「学校図書館等における読書バリアフリーコンソーシアム」という事業に取り組んでおり、そのサイトには他校の実践事例なども載っているので参照してほしい。

課題を三点にまとめた。この課題は学大附属特別支援学校だけでなく、全国的に共通する課題でもある。広い意味での読書バリアフリーをどう推進していくのが課題になっている。

- 1 学校司書の配置拡充による学校図書館機能の強化
- 2 様々な図書資料（バリアフリー図書を含む）の整備とそのための予算確保
- 3 実践の更なる蓄積・共有：学校図書館データベースの活用を！

これらの課題を解決するには、今がチャンスでもある。読書バリアフリー法、国の基本計画が定められ、2021年には特別支援学校の設置基準にも学校図書館の設置が明示されている。「多様な子どもたちの読書機会の確保」が方針の1つに位置づけられた国の「第五次 子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の具現化を期待したい。今後各地域の現場で実感できるようにしていくことが求められる。

最後に、芥川賞を受賞した作家市川沙央さんの『ハンチバック』は、読書バリアフリーを求める当事者の思いを込めた作品になっている。これは障害を持っている方々、自身の声をあげづらい人たちの共通の思いでもある。図書館や教育に関係する方々が、その思いに寄り添って、全ての特別支援教育を受ける子どもたちの読書環境のバリアフリーがさらに進展することを願っている。

(2) 学校図書館の整備・活用に役立つ司書研修の企画・実施

1) 学校司書に役立つ研修の実施

令和5年7月25日	「学びを支援する学校図書館をつくろう! アナログ編」	片岡 則夫氏(清教学園中・高等学校教諭/ 図書館振興財団) 中山 美由紀氏(立教大学兼任講師) 松岡 みどり氏(東京学芸大学附属小金井小学校司書)
令和5年7月27日	「学びを支援する学校図書館をつくろう! デジタル編」	高橋 菜奈子氏(東京学芸大学附属図書館) 宮田 諭志氏(成城学園初等学校教諭) 菊地 圭子氏(東京学芸大学附属竹早中学校教諭) 中村 誠子氏(東京学芸大学附属竹早中学校司書)

令和5年度は、「学校図書館図書の購入促進」に即した研修を志向してオンラインで開催することとし、例年通り、夏休み中の2日間に実施した。学校図書館図書の購入促進には蔵書の見直しが必須であり、自館の蔵書をどのように構築していくか、またそのための選書・廃棄について考えるため、1日目は「アナログ編」として小・中・高それぞれの現場で蔵書構築を続けてきた方々に話を伺った。2日目は「デジタル編」とし、近年のICT環境の大きな変化から今後一層の活用が期待されるデジタルアーカイブについて、その概要や現状を大学図書館・学術情報課の高橋菜奈子氏よりお話しいただいた。現場からは小・中学校の授業でデジタルアーカイブを活用した実践報告をおこなった。申し込みは、2日間で北海道から沖縄まで、のべ186名。また見逃し配信の申し込みは154名に上った。

2) 研修アンケートの分析 ★見逃し配信で視聴された方からのアンケートも含め分析を試みた。

「学びを支援する学校図書館をつくろう!アナログ編」 (アンケート回答数66件)

参加者の割合	学校司書	司書教諭・教諭	その他
	89%	9%	2%

理解度 (大いに理解できた+理解できた)	100%
難易度 (適切だった+易しかった)	98.5%
満足度 (とても満足+満足)	97.0%
実践度 (仕事にとっても活かせる+活かせる)	100%

※どの項目も、高い評価が得られた。研修会場の音声トラブルにより全体を通して聞き取りにくかったとのご意見が満足度に影響している。

▶アンケート自由記述より ★文末表現・誤記等は、司書部会で編集した。

●現在の蔵書がどういう構成になっているかを客観的に見る具体的な方法や、蔵書を構築していくときに意識する点などを学べた。

●利用頻度や鮮度などを見直す方法を知ることができた。

- 随時蔵書更新が必要であること、子どもたちの学びに応じて選書し「必ず活用する」本を準備しておくこと等を再確認することができた。
- 実践を踏まえたお話が、身につまされた。新しい気づきとなるところもあって、非常に面白く興味深かった。除籍に対してハードルの高さを感じていたが、研修を通して、より基準が明確になってきたように思う。次は、明文化させたい。
- この図書館で何をするのか・示すのか、児童にどう関わるのかという方針ありきの蔵書構築だと改めて思った。
- 「やりたい！」ではなくて「絶対やる！」と思えたことがいくつかあった。
- 問いを持たない生徒についての考察も聞くことができ、大いに納得した。司書として何ができるかを考える機会になった。
- 見直すべきこと、課題発見と共に、仕事をする上で気をつけるべき視点を再確認でき、有意義な時間となった。
- 自身で模索しながら行ってきた受入れ図書の選書や除籍候補のやり方や考え方が間違っていなかったのだと、自信が持てた。ただ、探究学習のための蔵書構築は発展途上なので、多様性には自信をもって積極的に取り組んでいきたいと思う。

「学びを支援する学校図書館をつくろう!デジタル編」(アンケート回答数 57 件)

参加者の割合	学校司書	司書教諭・教諭	その他
	86%	7%	7%
理解度 (十分理解できた+理解できた)			98.2%
難易度 (適切だった)			84.2%
満足度 (とても満足+満足)			94.7%
実践度 (仕事にとっても活かせる+活かせる)			82.4%

※難易度については、デジタルツールに対する苦手意識を持つ人は「難しかった」と答える人の割合が高くなった。また、実践度の数値は各校での ICT 環境の整備状況が大きく反映している。

《アンケート自由記述より》 ★文末表現・誤記等は、司書部会で編集した。

- サイトの案内だけでなく、内容や意義、注意することも詳しく教えてもらった。
- なんだか大層なものに感じていたが、実際の授業での活用や児童生徒の反応を紹介してもらい、一資料としてとらえればよいのだと理解した。
- 学校の貴重資料や指導要録などのデジタル化を進めている最中なので、大変ためになった。
- 講座の最後の休憩時間に自分が住んでいる地域のデジタルアーカイブを調べたところ、さまざまな情報が公開されていた。勤務する小学校や中学校の先生方にも、ぜひお知らせしたい。
- 今年度から図書館 HP を作成し、日常的に活用してもらっている。「文献検索」「探究に役立つ情報」のページに「デジタルアーカイブ」のページも追加したいと思った。
- 使えるデジタルアーカイブをご紹介いただいたので、早速自宅で見してみた。研修を受け、すぐに見てみようという意欲につながる研修だった。

- せっかく、子どもたちが、一人一台端末を持っているのだから、それを活かさない手はないと思った。
- 学校図書館でもデジタル資料を使った活動は、見切り発車の状態。こうして大学図書館との協働した信頼できる実践は、自分が授業に関わる時にどういう資料を準備したらよいか、生徒がどのような反応や行動をみせるのか予想することができたいへん参考になる。
- デジタル資料の扱い方や子どもたちへ必要な指導などの課題が多くあり、司書としても勉強していかなくてはいけないと思った。
- 学校との連携を考える上で、公共図書館として協力できる余地があることに気付けた。

3) 考察

1 日目のアナログ編では、清教学園や附属小金井小の様子を詳しく見ながら具体的な話をたくさん伺うことで、参加者の理解が深まったことがよく分かるアンケート結果となった。日頃ひとり仕事である司書にとって、自校の図書館運営の方向性が間違っていないか、他にどのようなやり方があるのかを知ることができるのは、大きな学びになることが読み取れる。片岡先生の蔵書構築のお話からは、長年のデータの蓄積によって裏付けされた分類や廃棄基準は説得力があるというご意見がある一方で、単年度契約の短い任期であったり、数校兼任で勤務時間も短い非常勤の司書では、日々の業務に追われて除籍・廃棄まではなかなか手が付けられないという雇用形態の悩ましい実情が垣間見られた。

2 日目のデジタル編には学校図書館関係者だけでなく、公立図書館や大学生、研究者など幅広い立場の方がご参加くださり、関心の高さが伺える。研修後に早速自校のホームページに郷土のデジタルアーカイブをリンクさせたり、図書館 classroom にジャパンサーチの説明を掲載したりと、すぐに動けるところから始めたという方々がいる一方で、デジタルツールに対して苦手意識を持ち、敬遠してしまうという意見も見られた。新しいものに対して積極的に知ることから始め、気軽に活用してみる柔軟さが今後の学校図書館関係者には求められるだろう。また、公開されている外部のデジタルアーカイブだけでなく、自校の資料をアーカイブ化することについて言及する意見は、デジタル資料のさらなる可能性を示唆している。

アンケートにはデジタル環境についての学校図書館間の格差も如実に表れている。図書資料とデジタル資料の併用で充実した学習が行われている学校がある一方で、ICT環境が整っていないなかったり、学校が「タブレットが配布されたなら図書資料はもう不要」という認識で危機感を感じているという意見も見られた。本来は学習や学校図書館環境を支えるはずのデジタルツールが、反対にそれらを阻害している現状もあるということは、学校全体として考えていかねばならない課題であろう。

4) 次年度以降の研修 ～アンケートから見えるニーズ～

アンケートから見える今後の研修への要望として、ChatGPT など生成 AI について知りたいとのご意見を複数いただいた。新しいツールをどのように受け入れ、学校図書館としていかに関わっていくべきかの不安や期待の表れと考えられる。また、図書資料とデジタル資料の共存や、様々なコンテンツを活用する上での著作権について学びたいというご意見も寄せられている。

全国のさまざまな場所で活動されている学校図書館に携わる方々にとって、他校の図書館の様子を知る機会や仕事に役立つ研修をオンラインで、無料で受けられることはとてもありがたい、という感想は非常に多く、今後も多様なニーズに応えられる研修を、持続可能な形で提供していきたい。

(3) 「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」での発信

I. データベース内での情報発信

表① 事例・記事総数 (令和5年12月末現在)

	授業実践事例	授業と 学校図書館	読書・情報 リテラシー	今月の 学校図書館	ちょこっと アイデア玉手箱	活かそう 司書のまなび
令和4年度	408	31	56	131	44	11
令和5年度	438 (+30)	33 (+2)	60 (+4)	144 (+13)	47 (+3)	12 (+1)

※学校図書館の日常 (令和5年12月末現在)

学校図書館トピックス 143 (前年度+20) /よみきかせ 144 (+20) /ブックトーク 136 (+20)
/広報 (お薦め本) 137 (+20) /レファレンス 134 (+21) /テーマ展示 137 (+24)

★データベース事業15周年を機に、掲載事例数を調査しなおしたため、前年度比が伸びている。

II. 授業実践事例の登録状況

●校種・教科別事例数

	小学校			中学校			高校			特別支援	計
	低学年	中学年	高学年	中1	中2	中3	高1	高2	高3		
国語	27(20)	15(13)	15(12)	24(21)	27(23)	16(13)	17(115)	17(14)	6(6)	2	166
社会		6(5)	12(10)	12(9)	6(5)	7(5)	4	8(3)			55
数学		1(1)	1(1)	2(2)	3(3)	2(2)	2(1)	1(1)	1		13
理科		4(3)	9(7)	6(3)	4(2)	1(1)	4(2)	1(1)	2		31
生活科	6(6)										6
音楽	2(1)	4(4)	4(2)	2(2)	2(2)	1(1)	2(2)	3(1)			20
図工	3(2)	1(1)	1(1)		2		4(4)	3(1)	1		15
保体	1(1)	2(1)		1	2(1)			3(1)			9
技術				2(2)	2(2)	1					5
家庭科			4(2)	5(2)	6(4)	3(3)	1	13(4)	1		33
外国語			1(1)	1	3(2)	2(2)	2(1)	5(1)			14
道徳	2(2)	1(1)	1(1)	3(2)		2(2)					9
総合	4(2)	7(6)	4(2)	5(4)	5(3)	2(2)	1	7(4)	1(1)	7(1)	43
特活	1	8(8)	2(1)							3	14
情報							7(2)				7
その他	4(3)	1			1(1)		2	2		2	12

表② 校種・教科別事例数 (令和5年12月末現在)

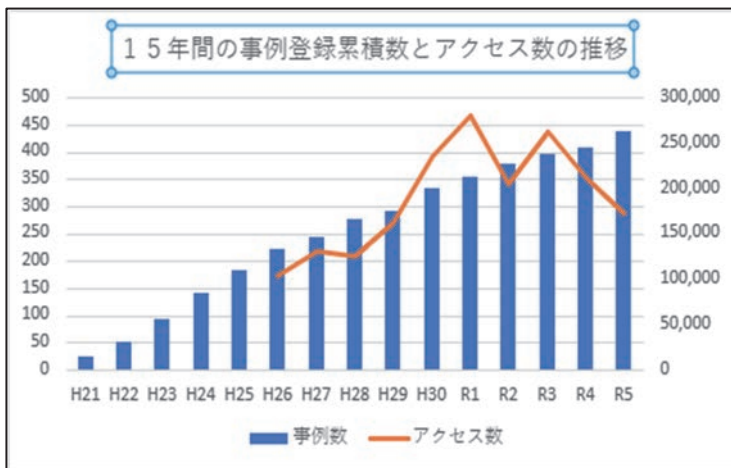
注) () 内の数字は、指導案のある事例数。中等教育学校の事例は、中学校、高校に振り分けた。■は今年度追加された項目

校名	教科	対象学年	教科からの図書館への要望
附属世田谷小学校	生活・図工	1年	仮装パーティーをおこなうための衣装作りの参考資料を集めてほしい。
附属世田谷小学校	生活	1年	1人1つの虫かごを用いて、生き物を飼育を行う。子どもの選んだ生き物の飼育方法を調べることができる資料を集めてほしい。
附属小金井小学校	国語	3年	読書活動の推進のため、図書館の利用データを提供してほしい。
附属竹早小学校	国語	5年	スティーブ・ジョブズの伝記で授業をする。ジョブズの伝記と、並行読書用に様々な伝記を集めてほしい
附属大泉小学校	国語	6年	児童がブックトークをするので、実演を交えてブックトークとは何か解説し
附属世田谷中学校	国語	中3	『論語』の本を集めてほしい。自分の心に刺さるフレーズを選び、色紙に書く活動をさせたい。
附属小金井中学校	国語	中2	「私の主張発表会」に向けて、意見文を書くために哲学的な問いを立てさせたい。生きることの本質に関わる問いが生まれてくるような絵本を読ませたい。
附属竹早中学校	社会	中1	鎌倉時代の成立年代を考える。中世の日記や歴史書、武家法や制度に関する資料を広く集めてほしい。
附属国際中等教育学校	社会	高2	日中戦争の授業をするにあたり特に「柳条湖事件」と「満州事変」に関連した資料を集めてほしい。
附属高等学校	国語	高2	東京学芸大学教育実習生による図書館授業 (内田樹「ことばとは何か」筑摩書房 現代の国語) に際して支援及び資料提供・館内展示をお願いする。
附属特別支援学校	総合	中1, 中2	校外学習の事前に行う調べ学習の導入授業と、テーマの図書の準備をお願いしたい。

※今年度の文科省事業として、すべての附属学校で実践事例の提供またはブックリストの掲載をめざした。

紙面の都合上、データベースに複数事例を掲載した学校も、表には1件のみ記載している。

Ⅲ.サイトのアクセス数の推移



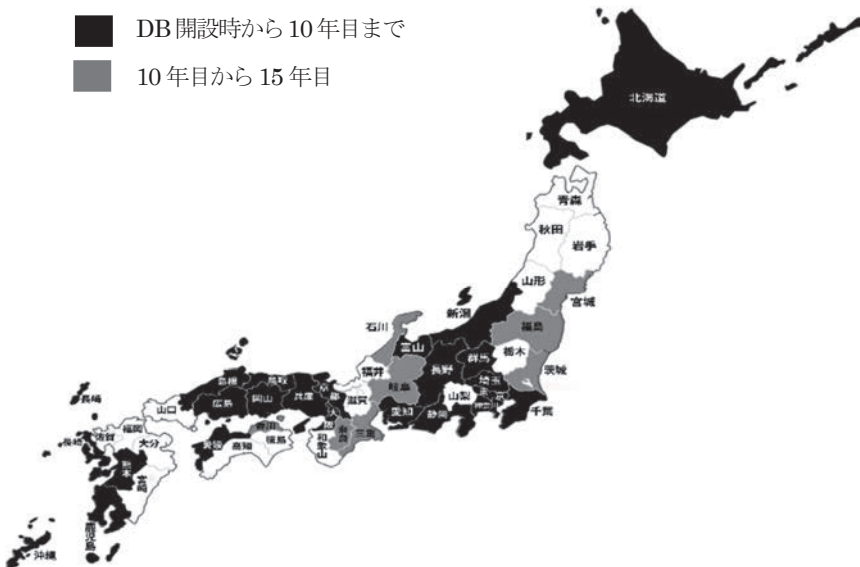
表③ サイトアクセス数 (件)
(令和5年12月末現在)

令和5年度	
累計アクセス数	2,029,879
年間アクセス数	172,823

※令和4年4月～7月までの約3ヶ月間は、大学全体のサーバ更新に伴い、サービスが停止していた。

●都道府県別事例提供状況

- DB開設時から10年目まで
- 10年目から15年目



- *1年目～10年目：23都道府県
 - *1年目～15年目：31都道府県
- <協力校種一覧>

国立附属学校	10校
公立小学校	43校
公立中学校	26校
特別支援学校	3校
私立学校	9校
大学図書館	1館
公共図書館	4館
県立子ども病院	1院

Ⅳ. サイトの案内や広報活動

*X(旧Twitter)フォロワー数 1654→1800→1831 (令和3年度→令和4年度→令和5年度12月末現在)

現在、Facebookは休止中。X(旧Twitter)も不定期で情報を発信している。

*本学教育実習生への広報

今年度も、「実習のてびき」に記載する他、各学校でも学校図書館の紹介とからめ講話等で案内した。また、実習期間中に来館した際に、直接案内することも複数の学校で行われている。

*本学学生へのサイト広報

- ・ [担当教員] 高橋 菜奈子 [科目] 図書館特論
- ・ [担当教員] 前田 稔 [科目] 情報メディアの活用

*外部へのサイト広報（令和5年3月～令和6年2月）

時期	広報・掲載先	内容
4月	荒川区学校司書研修	司書教諭・教科教諭との連携について
4月	鶴見大学司書教諭科目受講生への講話	学校図書館の仕事全般
4-2月	小学館「みんなの教育技術」	連載「本好きの子供を育てる読書指導のアイデア」記事内
5月	金融庁	合同授業
8月	子どもの本研究会YAA!オンライン講話	学校図書館の仕事全般
9月	群馬県図書館連携推進フォーラム	県内学校図書館・公立図書館向けの講習会。
9月	教育図書	教育図書HPに掲載
10月	東京書籍「こくごスタジオ」	サイト内記事「本の世界を楽しむヒント」
11月	創価大学の教員および教職大学院生	IB校の学校図書館運営と運営専門委員会の活動
12月	「図書館と県民の集い埼玉」 こども読書活動交流集会	学校図書館講座
12月	実践女子大学短期大学部 「児童サービス論」受講学生	「特別授業」：学校図書館と学校司書の仕事
1月	東京学芸大学教職大学院生（国語科）	IB校の学校図書館運営と運営専門委員会の活動

その他特筆事項として、書籍などでデータベースが紹介された。

『ライブラリー学校図書館VOL.01 読書と豊かな人間性』金沢みどり・雪嶋宏一（監修）金沢みどり・河村俊太郎（著）（勉誠社、2023）。

V.今年度の成果と次年度への課題

昨年度は大学全体のサーバの変更にともない、一時的にDBのサービスを停止する事態がおきた。このためアプリケーションの再構築が今年度最大の課題であったが、新しいシステムへの乗り換えが大学を中心に検討され、これにより過去15年間で蓄積された情報も保持されつつ、あらたな運用へと変更作業（詳細はp.21）が進められている。今年度のDBアクセス数は、平成30年以降毎年20万件を超えていたが、6年ぶりに17万件までに減少した。これにはDBの一時停止と新システムへの移行作業の影響は否めず、新システム導入以降の状況を注視していきたい。

また今年度は南山大学の浅石先生を中心とした学校向け教材探索システム BookReach（詳細は p.22）の開発にDBに掲載しているブックリストを提供し、各附属学校の学校司書も実証実験に協力した。BookReachでは教科書の単元と蔵書をむすびつけて資料を検索、リスト作りができる。書架を3Dで表示する機能なども備え、近年のICT化に即した学校図書館の蔵書公開のあらたな局面を具体的に例示している。今年度は、学校図書館運営専門委員会によるDB運用開始から15年目の節目の年を迎えた。今後は、こうした他団体や関係機関との連携を積極的にはかることで、「先生のための授業に役立つ学校図書館」というDBの名称に、より実態が伴ってくるのではないだろうか。

今年度、本DBに登録されている授業実践事例は438件となった。これは、この15年間で1年に平均約30件ずつ授業実践事例の登録件数が増加してきたことになる。現在では、学校図書館関係者のみならず、大学の司書課程を指導する教員や学生にも活用されており、今後もDBの普及活動とともに、事例掲載の増加に向け、外部からも実践事例を提供しやすい仕組み作りを検討していきたい。

学校図書館活用データベースの意義と活用について

東京学芸大学 学術情報課長 高橋 菜奈子

「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」は、2009年から文科省事業として、学校図書館を活用した授業実践の指導案・ワークシート・ブックリスト等をデータベース化してインターネット上で公開してきた。「先生のための、授業に役立つ」という名称にみられるごとく「学習・情報センター」としての機能を重視してきたデータベースである。授業の実践事例は年々着実に蓄積されてきており、国語・社会・総合学習が多い傾向はあるものの、全ての教科の事例が含まれ、学校種・学年についても、まんべんなくカバーされている（本書p.17参照）。アクセス数は、令和2年度のコロナ禍の影響と令和4年度のデータベース停止の影響を受けつつも、順調に増加してきた。（本書p.18参照）。

令和5年度は、前年のシステム停止の障害対応として、従来のコンテンツ管理システムのバージョンアップに取組み、サイト全体の再構築と移植に取り組んでいる。今後、BookReach（教科書単元と関連するNDCの図書を学校図書館蔵書から検索・閲覧できるシステム）やカーリル（全国の蔵書検索）との連携へも可能性が広がる拡張である。

令和5年度の文科省事業報告会においては、蔵書構築における学校図書館活用データベースの活用可能性について検討するため、本データベースに収録された事例を用いて授業利用された図書に関して分析した先行研究を紹介した（宮田ほか2018）。2017年8月23日時点での事例271件、収録されていた図書6,566件を対象とした調査によれば、各教科と十進分類法（NDC）には緩やかな対応関係がある。国語では9類以外は均等に他の類に分散していること、算数・数学では4類のほか5類7類が利用されること、理科は4類のみに偏っていること、社会では2類3類のほか4類5類6類が利用されること、音楽は7類9類が多いことが指摘されている。多くの教科で複数のNDCにまたがった図書が利用されていることが明らかにされた。授業実践が行われた年から図書の出版年を引いた鮮度（出版経過年数）については、大部分の図書が20年以内で中央値は5～10年付近であること、図工美術工芸書道は比較的古い本が使われていることが指摘されている。

この調査に用いられたデータの提供を受け、NDCと出版年の全体的な傾向を確認したところ、NDCの0類1類8類は少なく、2類3類4類5類7類が10%台、9類が20%の割合となっており、幅広い分野が利用されていることが明らかになった。出版年の傾向も2000年代以降が7割近くを占めていた。学校図書館の蔵書はNDC9類（文学）に偏らない蔵書構成が必要であること、また、蔵書を常に刷新していくことの必要性を再確認できる結果であった。

学校図書館で授業を支援するための蔵書を構築していくには、『第6次学校図書館図書整備等5か年計画』（R4年1月24日）に基づいて配分された予算を確保することは言うまでもないが、学校司書・司書教諭による選書の質を高めていくことが求められる。本学の附属学校の蔵書全体はインターネット上でGAKUMOPACを用いて確認することができ、さらに授業実践で活用された図書が本データベースに収録されている。蔵書の質を高め、より良い蔵書を構築するための参考として、これらを活用して、不断に蔵書の見直しを行っていくことを提案したい。

【参考文献】宮田玲，矢田竣太郎，浅石卓真，学校図書館の教員サポートにおける授業に関連した資料提供の事例分析. 日本図書館情報学会誌. 2018.9, 64(3), p.115-131,

https://doi.org/10.20651/jslis.64.3_115

新しくなる「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」

合資会社 風夢 橋本 健志

1. 新しいシステムへ移行しています

定期的に新機種への乗り換えが必要なスマートフォンと同じように、ウェブページの配信システムもハード、OS、アプリの更新が発生します。その流れの中で運用システムの更新停止に伴い「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」（以下、本サイト）を新しいシステムへ乗り換える作業を進めています。現行システムはオールインワンの統合型システムですが、各機能の連携が優先され、細かい検索が実現できないケースなども見られていました。今回の改修では、標準的なデータベース構成に置き換えを行い、一般的な検索や拡張が行いやすいように構築しています。

その中で、今後 ISBN を活用していくための拡張を施します。これにより外部サイトとの連携を図ったり、WebAPI など外部へサービスを提供することが可能になると思います。【注】WebAPI：ウェブアプリケーションの機能の一部を別のアプリケーションから利用できるようにする仕組みのこと

サイトの見た目は大きく変えず、従来の使い勝手を踏襲する形で実装を進めています。また、スマートフォンで見るときにもパソコンと同じレイアウトで表示されるようになり、同様の画面遷移でご覧いただけると思います。

改修を進める中で、今までに蓄積された情報の規模を改めて実感し、同時にその質の高さを強く感じています。統合型システムのデータベースを移行するのは複雑な作業になりますが、必要な情報や優先度を見極めつつ、多くの情報を引き継げるように進めています。

2. 時代の流れとともに輝く「先生のためのサイト」の意味

改修で既存情報に触れる中で「この情報を作り出すリソースの充実こそが宝物」との思いを新たにしています。授業準備や教員養成の面で考えた場合、本サイトには「①効果があった指導事例」「②質の高い指導案」「③手に入りやすい教具（図書）」がセットになった「良質な授業」の蓄積があります。

また、今回の発表でも（当たり前のように）教員と学校図書館司書が協力して授業を創っていました。教員への支援の必要性が喫緊の課題として話題になり、様々な形で支援スタッフが配置されはじめていますが「一緒に授業を創る」という点では若干ハードルが高い現実もあるように感じています。その「協力して授業を創ること」を本サイト設立当初（以前）からなさっていることがスゴイ！と改めて実感しています。本サイトは「協力して授業を創る事例」の蓄積とも言えますね。東京学芸大学には「①教員養成」と「②教育支援」の2つの柱があると個人的に認識していますが、本サイトは有益な情報を蓄積&発信する形で、それを体現しているように感じています。

3. 参加して下さったみなさまへ

教員を目指す皆さん、良い授業に多く触れましょう。そして、良い指導案をたくさん見ましょう。話題の AI は「既知の人知の集積」です。誰かが考え出した NextOne/NewOne の集合知です。ぜひ、NextOne/NewOne の授業を作り出す力を意識して身に付けてください。このサイトにはそれを学ぶ材料があります。どう作ることができるのか？のお手本にもなってくれると思います。

司書のみなさん、新任の先生や教師の卵たちに、このサイトを教えてあげてください。サイトの事例を紹介して、一緒に指導案を読み解きながら、次の授業を作るきっかけにできるといいですね！

報告会申込時の温かいメッセージを嬉しく拝見しました。みなさんの存在が、新しくなる「学芸大学のデータベース」の広がりを生み出し、さらに「新しく」して下さると予感しています。どうぞ、これからもお力添えをよろしくお願い申し上げます。

教材検索システム BookReach の開発と学校図書館活用データベースとの連携

南山大学准教授 浅石 卓真

学校図書館による授業支援、特に教師や児童生徒への資料提供では、様々なツールが使われている。例えば、授業で使える図書をまとめたブックリスト、学校図書館の活用事例データベース、蔵書検索システム (OPAC) などである。しかし、ブックリストは自館の蔵書でどれが教材となるかを直接は示せないし、ブックリストが用意されている教科は限られる。活用事例データベースは教科や学年単位で整理されているため、教科書の単元単位でのピンポイントの教材検索はできない。OPAC で得られる書誌情報だけでは、教材としての適切性を判断するために必要な難易度や可搬性は分からない。私たちは、これらの課題を解決した授業支援ツールとして、学校向けの教材探索システム **BookReach** を開発している。

BookReach の基本機能は、教材探索と事例登録の2つである。教材探索機能では、教科書の単元を選択すると、自館の蔵書の中でその単元に関連した図書が教材候補として表示される。この機能は、単元と分類記号 (NDC) との対応表を予め作成しておき、単元が選択されると対応した分類記号の図書を蔵書から抽出・表示することで実現した。検索結果の表示形式としては、書誌情報を一覧表示する「リスト表示」のほか、表紙画像を提示する「書影表示」、背表紙画像を表示する「背表紙表示」、さらに実際の書架をVR空間上で再現した「3D 書架表示」の4つから選択できる。また教材探索の結果は、図書の対象年齢や授業での活用実績で絞り込むことができる。事例登録機能は、教材探索でリストアップした図書を事例登録しておき、それを保存・公開する (非公開にして後から編集することも可能) 機能である。

BookReach の利用法は複数考えられる。最も基本的な利用法は、(1)資料提供を依頼された学校司書が、**BookReach** で教材探索して教材リストを作成し、教員と相談したのち現物を児童生徒に提供するというものである。次に、(2)予め学校司書が教材を **BookReach** に事例登録しておき、それを見た教員が学校司書に授業支援を依頼する。そして、事例登録された図書の現物を学校司書が用意するという方法も考えられる。さらに、(3)国語でブックトークが行われる場合に、児童生徒がブックトーク用の図書を **BookReach** で検索し、それを学校司書が手助けすることも考えられる。最後に(4)学校司書の研修会において、研修校の学校司書が **BookReach** に提供予定の教材を事例登録しておき、自校の教員や他校の学校司書がそれらを講評するという利用も考えられる。

BookReach は、浅石卓真 (南山大学)、宮田玲 (東京大学)、矢田峻太郎 (奈良先端大) が共同で開発・評価を行っている。そして、東京学芸大学附属学校の学校司書の方々には、**BookReach** の実証実験に協力いただいている。2023年には、附属校の学校図書館の蔵書を **BookReach** で検索可能にして、そのユーザビリティ (使い勝手) を評価する実証実験に協力いただいた。また、検索結果として表示される個々の図書は、東京学芸大学学校図書館運営委員会が管理している「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」の事例に収録されていれば、詳細表示から当該事例に飛ぶことができ、実際にどのような授業で利用されているかを閲覧できる。今後は、図書館システムと連携することで貸出状況をリアルタイムで反映させたり、3D 書架表示における企画展示を曜日や時間帯で入れ替えたりといった試みを行う予定である。中長期的には、**BookReach** で公開された登録事例を増やすことで、学校図書館の授業利用を促進させたいと考えている。興味のある方は support@bookreach.org までお気軽にお問い合わせいただきたい。

事業委員の先生方による座談会

「学校図書館のミライ ～データベース事業 15 周年を迎えて～」

2009 年 12 月 16 日に「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」（以下 DB とする）は東京学芸大学のサイト内に公開された。その時、誰も 15 年後があるとは想像すらしていなかった。今年度の報告会当日、会場にお越しくくださった事業委員の先生方を中心に DB 事業のこれまでと未来を語る座談会が行われた。

梅田（司会）：それでは時間になりましたので、座談会の方へ移らせていただきます。ご登壇いただくのは本事業委員である、帝京大学教育学部教授 鎌田和宏先生、元埼玉県立久喜図書館副館長そして東京学芸大学非常勤講師であります長谷川優子先生、白百合女子大学基礎教育センター准教授 今井福司 先生のお三方です。座談会の司会進行は鎌田先生にお願いしております。それでは鎌田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

第 1 話：2009 年にひらかれる DB 事業の前にそもそものはじまりがあった

鎌田：ご紹介いただきました帝京大学の鎌田和宏と申します。今回は「学校図書館のミライ～ DB 事業 15 周年を迎えて これまでの 15 年 そしてこの先の 15 年」ということで、この事業に関わりが深く、これからも関わっていただきたい方々に集まっていただきました。会場にも関係の深い人がたくさんいますから、求めがあったときには嫌がらずに答えることということでお願いしたいと思います。それでは自己紹介も兼ねながら、データベースとの関わりについてお話していただきたいと思います。最初に長谷川さんからお願いします。



長谷川：DB との関わりを早く話してほしいというプレッシャーを感じているので、そこから話したいと思います。この話の大元は当時の附属小金井小司書だった中山さんが関西学院高等部に探究学習の授業を見学に行くというツアーを組んでくださっていて、その帰りの羽田空港での 1 時間の立ち話が始まりです。「文科省の事業申請にいいアイデアが思いつかなくて…」と。

私には願いがいくつかありまして、この話はまだ学校図書館法の改正前、学校司書という職名が正式ではなかった時のこと、学校図書館は何ができるかが共通理解される概念としての〈共通語〉になっていませんでした。素晴らしい実践は行われているのですよ。授業者と学校図書館並びに学校司書との奇跡的な出会いでいくつもあるのです。しかし、事例発表はされてもどんどん消えてしまう。継続的に〈共通語〉にしていく方法として、私はデータベース、Web で公開をしていきたいと思ったのです。それがまず一つ。それで〈共通語〉にして、かつ、学校司書の職務内容を共通理解する〈名刺〉にならないかと思ったので

す。学校司書が何をやる人なのか、それは誰それさんだからできるのでしょうか、みたいな言い方をされるので、そうではなく誰でもできるし、やるべきことだからという〈名刺〉代わりにならないかなど。さらにその学校図書館を活用した事例が蓄積されることで、学校図書館の仕事を表示したレストランのメニューのようにして、そこから選ぶことができると思ったのです。人って「何でもできる」って言われてもオーダーできないのですよね。でも、具体的な例がいっぱいあれば、その〈メニュー表〉の中から選んでくれるようになります。

そしてもう一つ。当時あったのが、NDL（国立国会図書館）のレファレンス協同データベースⁱ（以下、レファ協とする）です。これによって新たに作られた展開がいっぱいありました。ただ当時は学校図書館に向けたプログラムはありませんでしたから、公共図書館のレファレンス技法を援用してやっていくわけです。でもこれは絶対に違うと私は思っていました。学校図書館には二つのターゲットがあって、そもそもその授業を担当される先生の教育の目標・課題があり、そしてまたそれを受ける児童・生徒たちから受けるレファレンスという、二重構造なのです。これはレファ協に出しても、本当に理解はされないだろうなと思ったので、学校のレファレンスというものを広く多くの人に見ていただいて、それをまた研究材料として学校司書たちに伝えていきたいなと思ったのです。

もう一つ。組織的にもっと強くしていきたい、公的団体のもっと大きいところと繋がるべきだとも思っていました。この事業の大きな特徴ではありますが、大学附属図書館が参加していることがポイントでした。当時日本図書館協会の編集委員だった大森輝久さんが「今年から東京学芸大学に（課長として）転勤したので、ぜひ学校図書館のために何かやりたい、何かあったら言ってくれ」とわざわざ（同じく編集委員だった）私にお電話をくださっていたのです。これはもう千載一遇のチャンス、教員養成の基幹大学である東京学芸大学の中で強く組織化していきたいという願いがあって、お願いしたというような流れです。長くてすいません。ここでやっぱり中山さんに振りたいのですけれども。

鎌田：今回は 15 周年なので、ぜひ記録に残しておかなければいけませんから。なかなかあるチャンスじゃないので中山さんから話していただけるとありがたいです。

中山：中山です。そもそも附属小金井小の事務室でポンと司書教諭の牧岡俊夫先生から「文科省からこんなプロジェクトの募集がきているよ」って渡されて、小金井小だけで受けるか、いや絶対無理と思って、その時ちょうど学内に学校図書館運営専門委員会という附属各学校図書館と大学図書館と附属学校運営部からなる組織が出来上がったところだったので、やっぱり仲間の力は欲しいなどは思っていたのです。ただ附属学校全体で請け負うのだったら一体何ができるか、あまり自分の中にイメージがわかかなかったのです。

その 1 カ月前、2009 年 1 月にオバマ前大統領がこれから就任ってところのシカゴに降り立つ、全国学校図書館協議会（全国 SLA）主催の北米の学校図書館ツアーに参加して、ホームページやオンラインデータベースの活用を目の当たりにしたのですが、その時の参加者や sl-shock という学校図書館の研究者や実践家のメーリングリストにも参加していたので、知り合いは全国的にいて、関西学院高等部の宅間紘一先生がご退職と聞いて、見学に行きませんかとお誘いをしていたのです。新潟や鳥取、長野、埼玉、茨城からもいらして、長谷川さんもその中のお 1 人でした。関西学院中高の読書科という探究プログラムが高校ではどう展開してきたのか、図書館と授業見学をさせていただいて、こういうのがね、日本全国に広がるといいのになって思いながら帰ってきました。さて、さようならってところで、いや実はって出し

たのがさっきの「学校図書館の活性化推進総合事業」という文科省プロジェクトの募集要項だったのですね。はい。よくぞ中身をつけてくださいましたっていう…。

鎌田：というところからスタートしたこの事業ですけれど、先ほど中山さんが言ったように1人ではできない。巻き込まれてしまった人がたくさんいたわけですよ。巻き込まれてしまった人の今残っている人っていうと、初期から3人いる。ちょっと今すぐに動けそうな方は、代表して附属世田谷中司書の村上さんかな。

村上：文科省DB事業がスタートⁱⁱ（2009年）したのは、学校図書館運営専門委員会が立ち上がった（2007年）のほぼ同時期でした。もしこの事業がなかったら、私達は何をやっていたのかなと思います。DB事業があったから、それをどうやって作っていくかをみんなで考える時間が持てたし、こういう形ができたので、本当にありがたかったと思います。15年経って、今日の報告にもありましたが、私達が立ち上げて運営していたものをBookReachの浅石先生たちが検証してくださっていることにも驚いたし、高橋課長は、私達は直感で動いている部分がすごくあるのですが、数字を出してきて、こういうことなんですよって言ってくださって。

「みんなで使おう！学校図書館」と最初につけたこと、それから「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」という名称ですが、あんまり長すぎるので変えたらという話もあったのですが、でも途中で変えることはやめた方がいいと大学附属図書館の担当高井力さんに言われ、そのままにしたのですけれど、でもそのままのタイトルで、今、皆さんに使ってもらっていてありがたいです。本当にやってよかったなと思っています。

それからこの強力なメンバー（附属学校司書たち）が加わってくださって感謝ですね。多分皆さん、毎月の更新は過重労働というか。私達は全員非常勤職員ⁱⁱⁱなのですよね。1日の勤務時間や年間の勤務日数が少ない人もいます。今日のような日を出勤扱いにすると、通常の勤務に支障が出たりもします。

それから事例入力に関しては、実はネットコモンズが結構不安定で、全部終わったと思ったのにやり直さなければならぬこともあるので、時間がかかっていたりもします。橋本さんがリニューアルしてくださっていて、使いやすくなるのを期待しています。私の後任の方が、これならやってもいいよって思ってもらえるようなデータベースになっていくのかなと思います。今後の15年に期待していますので、お三方の話をじっくり聞きたいです。

鎌田：はい。どうもありがとうございました。村上さんはすごくポジティブに話してくれましたけど、晴れの日ばかりではなかったようなことを僕は漏れ聞いたような…。

今、学校図書館運営専門委員会ができたという話があって、それがまずベースになってこのDB事業が始まっているのですけれど、その前はどうかだったかという、附属学校司書の方々が自主的な勉強会を、手弁当で開いていたのですよね。附属学校には附属学校研究会があって、いろいろな教科・領域の人たちがそれぞれで勉強会を月に1回ぐらい集まってやるチャンスがあったのに、学校図書館のセクションはなかったのですよ。それで私は、その頃は附属世田谷小学校教員だったのですが、2004年の夏の8月、当時の運営参事だった木村重茂光先生と平井文香先生のところへ掛け合いに行ってですね、その自主的な勉強会を何とか勤務にできないですかと話しに行ったのが、運営専門委員会の始まりだったのではないかなと思います。

できれば勤務扱いにするだけじゃなく出張旅費も出してほしいとか、附属学校ごとにいろいろな勤務形態があるので、ちゃんとお金を払って欲しいという話をしたのだけど、なかなかそれは難しく、各学校での独自の雇用形態があるので簡単にはいかないけれど、附属学校の校長副校長会のときに働きかけてみるからというお話をいただいて、だんだんそれが形になっていったというのが附属学校の学校図書館運営専門委員会の成り立ちだったかな。その辺りから始まって、先ほどの長谷川さんのお話に繋がっていくのですが、そして文科省事業を受けてしまったわけですね。

受けた当初から実はずっとこの会をカメラ越しに見守っていた人がいるんですね。あの頃は院生でしたが、今はもう3児の父になられた今井さんが少しご紹介していただけるとありがたいと思います。

今井: 白百合女子大学の今井でございます。今日も機材を持ち込んでえらいことになっているのですが、実は記録をたどっていただくとわかりますが、事業委員になったのはつい最近で、多分報告書には「協力」でずっと出ていました。第1回は2010年3月にデータベース完成報告会があって、中山さんにUstream^{iv}で中継してくれって言われたので、行きますわって話になりました。当時の東京学芸大学がインターネットだったので自分で回線を持ち込んでやっていたのです。記録を見ると、毎年冬に来て中継をUstreamでやっていたときもあれば、録画中継をしたときもあるのです。



継続して僕が考えていたのが、長谷川さんと同じく、やっぱり当時は学校図書館の実践発表会って仲間内だけで共有されて表に全く出てこなくて、記録が残らないというのが、もうずっと昔から問題だなと思っていたのです。少なくとも東京学芸大学の報告会ぐらいは誰でも見られるようにしておきたいというのが個人的な欲望であって、欲望が元々あったところにやってみないって言われたので、毎年記録を取って発信するというのをやらせてもらっていたと思います。

ただ相当に迷惑をかけていて、毎年の中継を外部に出すときに全部を許諾確認してもらって、初期の頃は先生によっては記録をカットし、あるいは児童生徒の顔写真にモザイクをかけるなどの配慮も細かくやって、それで配信をしていました。今はもう発表する先生の方で予め配慮されているような時代になったのでよかったですけれど。

あとは一つだけ言っておくと、Library of the Year という IRI^v がやっている「これからの図書館のあり方を示唆する先進的な活動を行っている機関を選考し顕彰する事業」について2016年にに関わり、本委員会が大賞を決める最終の優秀賞に残りまして、スピーチ^{vi}することになりました。それにあたって、やっぱり東京学芸大学がやっている意義は大きかったなと思いました。また、審査会場で一番印象的だったのは学校図書館ってそういうところだったのですねって他館種の方から言っていたこと、僕にとっては驚きだったし、そうかここまで表に出さないと、明らかにもう出しすぎだろうというぐらいまで出しておかないと、他の人から見てももらえないのだから気づきました。それでずっと毎年記録も続けているし、配信もお手伝いさせてもらっているって感じですね。

鎌田：ありがとうございます。今井さんはネットで中継してくれるお兄さんみたいに思ったかもしれませんが、学校図書館の歴史的研究で博士号を取られています。この本（根本彰『教育改革の学校図書館』東京大学出版会 2019）は、今井さんのお師匠さんが書かれた本ですが、今井さんもこれくらい分厚い重厚な研究（今井福司『日本占領期の学校図書館：アメリカ学校図書館導入の歴史』勉誠出版 2016）をされている方なのです。それをやられている傍らで、今日も自前の機材で…ってこれちょっとカメラを向けたいところですけど、すごいですね。はい。村上さん、写真撮っていただきますね。

第2話：DBが東京学芸大学内外に浸透することで生じる公益的な価値

鎌田：2巡目はですね、「ご専門からデータベースに提言」ということで、今までは昔話っぽかったんですけど、それぞれのご専門からこの15年間続いてきたデータベースについてご提言していただきたいと思います。マイク握っているから、今井さん、長谷川さん、鎌田の順番ですかね。

今井：私、実は司書教諭とか司書養成だけじゃなくて、教職課程も教えています。教職の課程で教育課程論とか教えているのですが、面白いぐらいにみんな学校図書館のことを知らないのですよ。当たり前ですけど教職を取っている人って、「学校図書館ってこういうところだったのですね」って1回授業ただけでびっくりされる。今の教職課程で学校図書館って正直、あの学習指導要領の中で学校図書館はこうですよってやるのですが、10項目中の10項目目みたいな最後の最後でおまけみたいに書かれている感じなので、多分一般的な教育課程論だったら取り上げないで終わってしまうと思います。最新の学習指導要領についてもここは概念で、ここはアクティブラーニングでと喋って終わっちゃうと思います。

私は教職の授業でも、この学校図書館活用データベースを紹介しているのですが、かなり絞って紹介しています。学校図書館の話の前に、とにかく指導案が載っているから、まずはこれ見てごらんさいと、ネット上にある怪しい動画を見るよりは、少なくともここだったら、東京学芸大学の皆さんで1回フィルターをかけてしかも授業実践でやっているものだから、何か自分が指導案を書くときの参考にしてごらんと。なので、もちろん学校図書館で看板打っていることは大切なのですが、一方で何か他の教職課程とか一般教育課程みたいところで活用していくってことも、今後ちょっと可能性として考えていった方がいいのかなと教育の現場にいて思いますというのが一つ。

それから、多分これはネットコモンズの制限中の制限で、もう橋本さんが解決してくださるのだと思うのですが、スマートフォンで見ると、ろくに見えないのですよ。新しいDBのバージョンだと、多分橋本さんが相当頑張ってくれて、スマートフォンでも大体似たように見えるように持っていつてくれるのではないかと、無茶ぶりしておいて、私の要望というところで話しておきたいと思います。ありがとうございます。

鎌田：今どきの若い人っていうと、なんだか自分が年取ったなみたいな感じですけど、スマートフォンでまず見るのですよね。パソコンがあるのだからパソコンで見たらって言うのですが、うちの学生なんかもうすぐスマートフォンですよね。スマートフォンでアプローチできるってすごく重要な話ですね。ですので、橋本さんにはいろいろと、いつも無茶ぶりばかりで申し訳ないと思うけど、え、（風夢の橋本さんがご自分のスマートフォンの画面操作をして、にこやかに掲げる）もうできている、すごいな。ちゃんともうベータ版ではできているのですよね。楽しみにしています。はい、ありがとうございます。

続いて長谷川さんお願いします。

長谷川：やっぱりこちらのDBの〈浸透ぶり〉は外側の方がよくご存じです。完全にはチェックしてないのですが、私が見た範囲内での司書教諭の教科書には必ず参考のものとして、ほぼトップに近い形で載っています。最近見つけてびっくりしたのが、司書課程の「情報資源概論」（岸田和明編著『図書館情報資源概論』樹村房 2020 p111）にも出ていました。つまりですね、学校図書館の選書のためのチェックツールが欲しいが、今はほぼない。一方、非常に具体的になっているので、「参考にDBのリストを使って下さい」と言えるのです。公共図書館の人たちも知っているという存在にまでなりました。これしかないという存在なので、去年止まっちゃったときはもうどうしようかと思いました。大学での課題が全部停止。仕方なく、これが動くまで待っていてくださいという状態（笑）。

そしてもちろん、私が願っていた学校図書館の姿というのが共有されましたし、多くの方に見せることで、学校図書館がこれをやるんだ、ここまでやってくれるんだ、当たり前なんだって認識してもらったと思います。〈名刺〉にも、〈レストランのメニュー〉にもなったってすごく思うのです。

もう一つ、私が願っていました〈外部の方々との連携〉、NDLとか教育センターとかについてですね。これは予想外の展開になりました。

扱っているのは学内だけの事例ではないのです。広く北海道から沖縄までの事例があつて、これは実は並大抵なことではないと思います。にもかかわらず、それをほとんど附属学校司書の皆さんに相当な高負担をかけて続けてこられました。よその方々から東京学芸大附属の学校はどこもすごく恵まれていると誤解を受けていると思うのですが、そうじゃないのですよ。でも、いつも村上さんが軽やかに「私達無理していません、かなりいい加減にやっていて…」と緩やかにかわされてしまうので、大変さがあんまり伝わっていないのかもしれないけれど。

もう1つですね、これだけの〈公益性の高いもの〉をこれだけの少数のメンバーで維持するって信じられないのですが、でも返ってくるものもすごく大きかったと思います。DBがあつたことで、この学校司書部会の皆さんの結束力も強く、研修内容もより深くなっていったのではないのでしょうか。そして、実践を重ねながら専門家として研究していく姿がごく当たり前、気負った様子もなく続けられたと思うのです。専門家・実践者として絶えず編集して発信していくことを繰り返されていて、皆さんの力がどんどん高まっていったことが、東京学芸大学にとってもこのデータベースが偉大な存在だったという証しになっていると思うのです。外部に開かれた〈公益性の高いこと〉をしつつ、同時に結果としてそれぞれ現場の学校図書館に返していращやる。それがすごいなと思って。大変だったけれども得たものが、結果として皆さんの力になり、東京学芸大学附属学校の図書館そして大学自体も、ですね、すごく強くされていったのだから実感を感じました。はい、以上三つですね。

鎌田：附属の学校図書館担当者の結びつきを強くしたっていうお話もあつたのですが、それをやっぱり支えてくれた人もいるのですよね。確かご着任のときには学校図書館が専門だとは言え切れないところでご研究されていた前田先生。今、学校図書館サービス論とか放送大学でお持ちですけど、前田先生の、後押し横押しそして、権威がなければここまで来なかったなって僕は思っているのですが、前田先生どうですか。この東京学芸大学に着任されてこの事業に関わられて、どんなことを感じられるか。

前田：本学で学校図書館学を担当しております前田稔です。東京学芸大学は特殊なのだと、すごい人たち

がいるから実践できているのだらうと言われますが、必ずしもそうではない歴史の積み重ねを強く感じています。元々附属学校の図書館は世田谷地区と小金井地区以外はスタッフ不在、停滞気味でした。大泉地区や竹早地区に学校司書が着任したことを機に学校図書館が明るく使いやすく大改装され、校内への実践発信などもするようになり、だんだんと附属学校の教職員の意識も変わってきました。なかでも、授業活用がかなり進展していた世田谷地区の取り組みを互いに学びあい、連携しあいながら徐々に洗練されていきました。附属高校でも、学校司書の方が授業と結びつけなければ意味がないというポリシーで長年にわたり高校生の知識欲を刺激し続けてきましたけれども、外部への〈広がり〉というのがやはりなかったのですね。

そのころ「附属学校がそもそも東京学芸大学にいないんじゃないか」といった世間の風当たりが非常に強くなった時期があり、それに応じて附属学校の存在意義を再定義する試みとして、附属学校を横断する部局が大学の中に生まれました。独立した学校のようなばらばらな運営状況を変革し、各附属学校同士を結び付ける要として、校種横断的な側面をもつ学校図書館活動に白羽の矢があたったのです。当時の平井参事は各学校や大学本部に熱心に働きかけ、学校図書館が連携する礎を築きました。

また、附属世田谷小学校教諭であった鎌田先生はその渦中に大学教員に移られ、附属学校図書館の実践をアカデミックな視点で教育学のなかで理論化して下さるようになっていったことで好循環をもたらしました。

公立学校などでは、教育委員会や校長などを含めたすべての関係者が力を合わせる事が大事だと言われてはいますが、それはこの東京学芸大学でも一緒に、大学図書館や司書教諭、学校司書、運営参事あるいはデータベースを構築した風夢さんなども一緒に力を合わせて、非常にうまくかみ合いながら進展してきたのだといえるでしょう。

鎌田: どうもありがとうございます。いろいろところでこの事業を支援してくださっていたのですよね。私は附属学校の教員だったので大学の中にいろいろと影響力を及ぼすことなんか全然できないし、この事業自体は協力しましたけれど、大学の学内での位置をちゃんと保てるようにいろいろところで働きかけてくださったのが前田先生だったなって私は思っています。前田先生はそれと並行して、大学の中に学校図書館を学ぶ授業科目を創設され、教員養成の中でも学校図書館の意味がわかるようにと働きかけられていたなって。この事業を側面から、そして後ろからそして前から引っ張ってくださるってことで、大きな力をいただいたなと思っていますので、どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

第3話：これからのDBに期待すること—継続と拡張 教育のインフラとしての学校図書館

鎌田: 最後ですが、今後に期待することですけど、私はこのDBに関わる前に「教育実践データベース」で、当時「教育実践総合センター」という教育の部門なのですが、その実践データベースに事例提供という形で参加させてもらいました。附属世田谷小学校の授業事例を200点以上提供したのですが、附属図書館のデータベースシステムが変わるときに全部消えちゃったという話があります。多分それは図書館のせいとかじゃなくて、そのデータベース事業を継続的にやろうっていう大学の先生がそのときいらっしやらなかったのですよね。具体的な実務を担当された、そのときのリーダーは高鷲忠美先生。当時の附属図書館長だったのだけれど、その下で働いていらっしやった教育学の先生が、きっとあんまりそれほど重要だ、継続しなければなって思ってたのだらうなって僕は思うのですよ（その時、既に高鷲先生は退官さ

れていらっしかったです)。総合的な学習の時間をはじめ様々な授業事例があって、指導案もかなりたくさん掲載されていたし、それから実践記録も入っていた画期的なデータベースだと思っていたのですが、〈消えちゃった〉というのが一番僕はつらかったなと思います。そこじゃないともう見ることができないようないろんな資料もそのとき投入したので、自分の資料がどこにあるかなんて、ある時には検索すればすぐ出てきたので使いやすかったのです。いろいろと大学の先生に聞きましたけれど「データベースは科研費とか研究費の切れ目が縁の切れ目なんだよ」って言われて、そういうものかなとか思いながら聞きました。ですので、今後のDB事業に期待することはまず僕は〈継続〉してほしいなと思います。

先ほど今井先生から、教育学の、教職とか教育実践のための基礎情報として必要だってお話がありました。なかなか、系統的体系的に授業実践の資料、特に指導案などを、収集して、そして公開しているデータベースってそう多くないのですよ。今回我々がやっているのは、学校図書館を活用したってことで一つの角度付けはありますが、15年の長きにわたってですから、学習指導要領が変わる前と後もわかるのですよ。そういう中でどういうふうな教育実践が展開されてきたってことがあるし、あと子どもたちに提供される本って結構初版が出たら再販されないものも多いのですよ。そうするとそこで提供されてきた事例でこんな本が出ていたというのがわかることは、実は歴史的な意味もあるかなんて思っています。ですので〈継続〉して欲しいっていうのが一番の願いなので、今回の風夢の橋本さんがやってくさっている、次に乗り換えるというさっきのデータベースのリニューアルの話は、僕にはしみる話だったのです。ありがたいございますという思いでしたね。どこかでミラーサイトも作っとかなきやいけないかなんて密かに思っていたりもするのですけれど、継続して欲しいっていうのが第1でした。

それからあともう一つ〈拡張〉ってことを考えたいなって思うのですが、今回はこちらにはいらっしやらなかったけれど、事業委員でもある専修大学の野口武悟先生と日本教育方法学会のところでは必ずラウンドテーブルがあるときには参加して(今年度はできなかったのですけれど)、教育方法として学校図書館を使うとか情報を使うってことをもっと真ん中に置いてみんなに働きかけていこうっていう、そんなセッションをやっているのですよね。ですので、事業を拡張していくとか事業の実践を円滑にしていこうという視点からも〈学校図書館は当たり前を使う〉っていうところになったらいいなって思います。先ほどお名前を出させていただいた高鷲忠美先生が「学校図書館ってことが言われなくなることが最終的な目標だ」っておっしゃっていたのですよ。「学校図書館っていうのは教育のインフラだから、うちの学校には水道がありますよとかトイレがありますよとか誰も言わないですよ。ていうぐらい当たり前のものとして、みんなが日常的に使うものになっていかないといけないのだよね」っておっしゃっていて、〈教育のインフラとしての学校図書館〉ということをずいぶん教えていただきました。そんなふうになってほしいなって思っているので、広げてほしい、教員養成の「旗艦」大学の附属学校として。

運営専門委員会はまずは司書のみなさんから始まった。それから司書教諭の先生がかなりたくさん参加して下さるようになって、今回も司書教諭の先生たちの働きなしにはこの事業報告会はできなかったと僕は思っています。最後は附属学校の先生たちは「何?図書館使うとかって聞くわけ。当たり前でしょ」っていうふうになってくれたらいいなって思うのですけれど、そこはまだまだ道のりがあるかなと思います。かつて附属学校に勤めていた者としては温度差が多分にあるだろうとは思いつつ、そんなふうにして当たり前になってくるといいなってことが、私は今後のDB事業に期待したいことになると思います。

お次はどなたに渡せばいいですか。

長谷川：ちょっと違う角度からお話をしたいと思います。このDBはやっぱ東京学芸大学だからこそで

きたものであり、やらねばならなかったのだと思うのです。学校図書館教育を最初に切り開いた大学ですので、しかるべき、やるべきものだったんじゃないかって改めて思います。今年は「学校図書館法 70 周年」なんです。振り返りますと、今日、この『教育改革のための学校図書館』（前掲）を読めば、この当時のことは今井先生にお話いただくのがいいと思うのですが、やはりこの東京学芸大学はとても大事な場所だとお分かりになると思います。戦後の新教育の波を受けて、新しい学校図書館の本当のあるべき姿を模索されていた、あの遙か彼方の先輩たちのご遺志を、改めて何かここで考え直すのにとってもいい機会だと思います。それこそがこれから 15 年の学校図書館の未来の核になるのだらうと思うのです。

皆さんの努力の成果として、私は学校司書像っていうのはある程度共有されたなと思っています。環境等々追いつかない部分は別として、方向性はけっこう見えてきたかなと。しかし一方、はるか昔戦後の新教育の中で学校図書館の未来を夢見、司書教諭像を描いていたと思うのですが、今現在司書教諭の姿はその姿が見えなくなっていないでしょうか？

幸い今日も、プロ意識の高い学校司書と、学校教育のプロの教員と一緒に授業を作られると「ここまでできる」っていうことを見せてくださいました。この東京学芸大学附属の司書教諭の先生方こそ、これからの学校司書とそして一緒に授業を作る教員のための教育を作ってくださいているわけです。それをもっと前に出していだきたいなって、毎回思うのですね。そして「学校図書館法 70 周年にこの大学でこそ！」と思うのです。

そしてもう一つ、今度はちっちゃい話をさせてくださいね。これまでの 15 周年の経過の中でかなり負担を持ちながら学校司書の方々が厳しい勤務条件の中で頑張っていたらっしゃった。そのことって実は今、学校司書配置はもう 6 割を超えて状況も様々なのですけれども、学校司書がいる学校がこんなに増えてきた次の段階は、やっぱり〈1 人じゃできない〉ということなのです。ご存じのように〈つながっていくこと〉がとても大事です。それを、支援センターのようなしっかりした組織でということもありますけれども、なかなかそこまでいかない時に、この厳しい環境下で、ここまで実践的な研究も進められてきた皆さんの姿って、「立派な支援センターはなくてもできる」という一つのモデルになるのではないかなと思うのです。全国の各地域で学校司書を支援する立場の方々でありますとか、学校司書ご自身も 1 人でやっていく時代ではありませぬので、ぜひこちらをモデルに、ゆるやかにつながり、学校図書館活動を外部へ編集発信していく新しいモデルのヒントとしても見ていただけたらと思います。

さらに、そういう意味でも公益性の高いこの DB、例えばその全国からのアクセス数を、東京学芸大附属各校や大学で、組織的に学校図書館の評価指標としては無論、学校経営の評価指標として評価頂けないでしょうか。可視化して位置付けることが、今後の継続維持に繋がっていくのではないかなと強く願っているものです。以上です。

鎌田：今井さんに行く前に、当時文部科学省でいう「学校図書館担当職員」ってあれですね「学校司書」って名称がまだ法律上に位置づけられなかったときに、質向上に関する会議で、ですね、出た最終レポートで示された「学校図書館担当職員の職務」^{viii}っていう、あの図ですよ。

これは今 6 割の配置と言っても月に 1 日しか来なくても配置されていることになっている統計の取り方なので、いろいろ問題はあるとは思いますが（2023 年 12 月 25 日の読売新聞朝刊で、同社の独自調査による学校司書の勤務実態が報道された）、以前に比べてずいぶん進歩していることは間違いない。だけど配置された職員の学校司書の方の事業のモデルは、これに出たときには、絵に描いた餅まで言うところかなとは思いますが、すごく理念的なものだった。それをね、ずいぶん附属学校の司書部会の

方々が具体的な形で見せてくださっていることの意味は大きいってことが今のお話の中にあるのかなと思います。

あえてあともう一つ申し上げると、〈司書教諭 頑張れ〉って話ですよ。今日総合司会をやってくさっているのは梅田翼さん、附属世田谷小学校の司書教諭の先生ですけども、これから司書教諭がどう機能するかってことはもう一つ研究しなきゃいけない課題かなって、今のお話を伺いながら思いました。今井先生お願いします。

今井：はい。二つお話したいことがありますて、1つ目が、今〈学校司書〉って話が出てきたのですけれど、これは学校司書も教員もそうなのですけれど、〈研修環境〉って僕、実は悪くなっていると思っています、この5年ぐらい。なぜかという旧 Twitter とかあの辺の SNS が割とオープンにならなくなってきていて、Facebook のページとか見ているとあれはもう知っている人同士のやり取り。他の SNS を見ると何かオープンなものがどんどん減ってきている。

何が言いたいかという全国 SLA と JLA (日本図書館協会) と学図研 (学校図書館問題研究会) に所属していない人でも気軽に受けられる研修会みたいなものが、実はすごく選択肢が狭まってきていると思っています。しかもそういう情報が得られにくい。情報の状況がどんどんひどくなってきていて、僕は特に Twitter が X に変わったぐらいから、もうこれは危ないなと思っています。

東京学芸大学の DB のいいところは、研修会を継続的にやっていて、それは別に参加資格は問いませんよ、どなたでもいらっしゃい、しかもオンラインでも受けられるよ、って形で広く、研修の機会が全く得られてないような人に対しても得られる情報っていうことで残り続けている所だと思います。

これは DB だけではなくて、やっぱり僕は DB 以外に付随しているところも、実はこの東京学芸大学の取り組みとしてはとてもいいところだと思うので、そこも含めて残して欲しいと思っています。

単にこの DB を、例えばお金をつけてあと 15 年残しましたってだけだと、多分 15 年後には全く違うものになってしまうような気がします。

今日はなんか褒め合うところみたいな部分があって、外の人から見るとなんか不思議に思うかもしれないけれど、でも褒め合うことをしなかったら、多分何が良かったかって中の人には絶対わからないところが出てくるので、そこは本当にポジティブに評価していくべきなのじゃないかなと思っています。

二つ目はそれに関係してこの東京学芸大学の組織って本当に面白いと思います。正直、他のところではお目にかかれなような方にもこの場ではお目にかかれる。特に毎年のように司書教諭の先生方が出してこられる司書との実践を見て、わくわくするのですよ。こんな面白いことやっているのだ、教育にはこんなこともできるのだと、毎年、本当に楽しみに来ているぐらいです。

また、多分この司書部会の方もそうなのだと思うのですが、いろんな人を巻き込んで味方にしていく力もすごいし、東京学芸大学の学校教育に関わる人もこの場に出してくれるような状況を作っているのもすごいですし、これは文科省の事業自体のいいところなのかもしれません。毎年テーマが変わっていて、毎年挑戦しなきゃいけないって、違うことをやらなきゃいけないっていうのはデメリットのように聞こえるかもしれませんが、ただ、東京学芸大学のチームとしては皆さんも飽きないで続けられるのかなと。

ネタは去年と同じようにまたは焼き直しでやりましょうか、そういう報告会や研修会って図書館業界にもあつたりするのですよ。やるのが自己目的化しているような状況で、やっぱり何て言うのでしょうか、新しいことに挑戦していて、ちゃんと意味を持たせながらやっているっていうところを続けるのってすごく大変なことだと思うのです。そこはうまく具合にいろんな人を巻き込みながら味方につけて、何か小さ

なチームというよりは大きなチームで続けて欲しいなっていうのは僕の願いかなと思います。

鎌田：はい、どうもありがとうございます。お話をたくさんいただいたのですが、そろそろあと5分ですね。ええ、5分じゃない。15分あるのか。もう一巡ぐらい話ができるのですけれど、どうですかね。今聞かれていたそのフロアの皆さんはこのデータベース事業について、必ずしも楽しくて取り組みやすい事業じゃないと思うのですけれど、一言言っておきたいってことはないですか。梅田さんは、今日はずっと原稿を読むだけだったでしょ。自分の言葉で語っていないでしょう。

梅田：司書教諭代表で、はい、すみません。数年前まで何度か実践報告の方をさせていただいて、それはそれで非常に楽しくて、次は何をやるか、これを発表したら面白いんじゃないかなとか考えたりしていました。去年と今年度は司会をさせていただいているので、とにかくつつがなく進行することだけを考えている状態なので、「何かを創り出すクリエイティブな感じ」というような「楽しさ」っていうところとはちょっと離れているところかなと思います。

ただ実践報告される方々が楽しくやってもらえたらなと思っていますし、「司書教諭としてどんなことをするのか」ということは、やはりこの場に参加することによって自分自身も考えたかなと思います。大学で卒業するときには司書教諭の講習は終わっていたので一応は持っているけれども、バッジのような飾り的な感じだったのです。実際それを使って自分が何かやるっていうのは、本当にここに来てからでした。公立の学校では12年間やりましたけれどその間、一切ない。ここに参加して真剣に考えるようになったかなと思うので、すごく勉強になると思うし、いろんな刺激を受ける機会だなと思っているので、毎回楽しみです。

鎌田：公立の学校にお勤めになっていたときは、これっぽっちも図書館のことはしなかったという、今すごいことを告白されていましたね。でも在学中に司書教諭の講習は受けていたのですね。授業で調べて話だったのですけれど、やっぱりこの会があるといいですね。

梅田：いいと思いますし、もっといろんな人に見て欲しいなって思いました。公立の時代に一緒にやっていた国語を専門とする仲間が、たいがい学校図書館の担当になっています。そういう方々のお名前が、去年は参加者の名簿の中にありました。もっともっと参加してくれる仲間が増えればいいなって思います。

鎌田：ありがとうございます。いきなり振っても話せるのが附属学校の先生のすごいところなんです。だからきっと課題は、梅田先生のお勤めの学校の中でどれだけ広げていっていかるところですよ。附属学校はなかなか手ごわい教員集団なのです。僕は公立学校の実践研究にもこの15年ぐらい携わらせていただいているのですけれど、公立の学校はトップがこうだって言えば大体みんなそっちを向き、トップが辞めたっていうとみんな辞めちゃったりとかするのです。そういう学校が結構あると思います。それはちょっと切ない話だなって思いつつながら見ているのですけれど、附属学校の先生たちは、例えば梅田先生がこれやりましようよって言っても、何でそれやらなきゃいけないのとか平気で言う人たちの集まりですからね。そこを一生懸命働きかけて、やり続けているって、すごく大変だと思うのです。でもそこが変わったときに多分日本の教育界は変わるかな。いきなり日本の教育界の話までしちゃいますけれどね、そこが大きなポイントなのだろうなって思うのですね。

あと最初にお話していただいたので、多分もう出番はないと思っていらっしやるでしょうが、古家先生がここ何年も支えてくださっていることは、本当に我々の力なのです。附属学校運営参事って別にこの仕事だけやっているわけじゃないので、本当に大変なのですよ。12校園のいろんな様々なトラブルとかみんな古家先生のところへ行くわけですよ。それを解決しながら、でもこの事業にいつでもね、フルコンタクトで来てくださっている。

先生には型通りのご挨拶は最初にいただきましたので、ちょっと率直なところをお話いただいてもよろしいですか。

古家: いや油断していました。7年間の7年目ですね。最初に運営参事を仰せつかるまで、学校図書館運営専門委員会の存在は全く知らなかったのですが、やらねばならないってなった時に、僕はあの、本好きだった。本好きから始まって、東京都の公立学校長をやっているときに、校長ってこんなことができる、よしやってしまえ！って、予算がついたときに一緒に本を買いに行こうって委員長と副委員長を連れて行きました。「100万円あるから」と、あらかじめ言っておいたのです。そしたら子どもたちはやっぱり自分が買いたい本だけじゃないんですよ、他の友達とかいろんな下の学年の子にも聞きましたと言って、トーンだったかな、一緒に行って選んだ。「最高に幸せな瞬間！」「最高！」と子供たちは本当にもう嬉しそうな顔をしてね。そんな話を何人かの方にしていたのだけれども、まさにその子供たちの嬉しそうな顔を仕事としてやっている人たちが、ここにいる司書の皆さんだなんてことですね。もう個性が強いなんていうような話じゃなくて、さらにその上に行くような、そういう人たちと、本をどうする、図書館をどういうふうにご利用するって話を熱く伺うのが、本当にもうずっと楽しみでした。だから、7年ですけれども、もうちょっとだけお手伝いをさせていただこうと思います。

鎌田: ありがとうございます。本当にこういう理解のある方に支えられて我々はここまで進んできたかなって思うのですけれど、後数分あるのでちょっと嫌な話も。この素晴らしい仕事をする学校図書館スタッフの方々の処遇が必ずしも良くないっていうのが、僕はずっと最後まで退職するまで悩みでした。実はここにいらっしやる附属竹早小・附属特別支援学校司書の宮崎さんとは今年の5月に学校司書の処遇を改善しようというシンポジウム（2023年5月27日に開かれた、文字活字文化振興財団によるシンポジウム「学校司書の社会的地位の向上をめざして」於：大正大学）に一緒に出させていただいて、つらい話も聞かせてもらって、会場からもね、たくさん出てきました。何とかやっぱり専門職を専門職たらしめるような待遇処遇と環境をですね、考えていかなきゃいけないなって思うのです。そういう意味では東京学芸大学がね、教員養成の基幹大学だって鷺山恭彦元学長がおっしゃっていましたが、基幹大学がやっぱりそういう手本をね、示してくださるといいのにといいながら、ずっとこの事業を見つめていたので、そこについても一石を投じることができるといいなとは思っています。

ただこれはなかなか、附属学校は先に12校園ありますって話をしましたけれども、それぞれに学校での雇用の形態や条件が違うので、簡単に東ねられる話ではないという厳しいところではあるのですけれど、（教員養成の基幹大学の）附属学校が一つお手本を示していただいて、専門職として学校司書の方々の処遇するっていうところを、見せてくれる日が来るといいなって、このDB事業のこれからってことで一つ申し上げておきたいと思います。

それがないと、教員から「仕事手伝って」とは言いにくい。これは公立の学校の先生方もおっしゃっています。ですから我々教員と司書が五分五分の関係で子どもたちの教育に関与して学校の教育実践をよく

していくためには、やっぱり学校に関わっているスタッフの平等性が絶対必要だと思う。そこにも一石が投げられる日が来るといいなと思うのです。そのためにはまず、学校図書館を利用するのは当たり前だからそのうち言われなくなる日が来るといいなって言いましたけれど、その途中の段階としてね、学校図書館を活用した教育実践ってこれだけの価値があるし、効果があるしということを示し続けていかなきゃいけないと思うのですよね。

このDBって、とてもストイックに作られていて、「こんなに効果がありました」とは、みんな書かないですね。なかなか教育実践って個別性が高いものですから簡単には〈成果〉とか〈効果〉とかって言えないと思うのだけれど、でも後に続く人たちにとっては、「これが効果的だったらやってみようかな」というのはありますよね。今日、例えば生徒さんのコメントが一言あるだけでも全然違う。今回は、学期末に向けて一番忙しいときにこの準備をしてもらってなかなかいいづらいところなのですけれどね。そういう〈効果〉とか〈成果〉も示し続けていく必要があるのではないかということ、最後にちょっと申し上げておきます。

そろそろ閉じなきゃいけないのですけれど、一言ずつぐらいどうですか最後のご挨拶。

今井：一つだけ言っておきたいと思うのですが、一番今困っていることは〈映像〉がないことです。新しいDBでは例えば〈授業風景の映像〉みたいなものが権利処理済みで載っていてくれたら、それだけで個人的にお礼をしたいぐらい。気軽に見てもらえる人が、多分潜在層はいっぱいいるので、トライしていただけると嬉しいってことを言い残しておきます。

長谷川：今回のご発表の中ですごく嬉しかったのは、浅石先生のグループがこのDBを使って次の段階に連れていってくださることです。こうやって形になっていくと、やっぱりそれを見つけて手を差し出してくれる人たちがいるのだからってのを今回知りまして、すごく嬉しかったです。

鎌田：はい、以上です。どうもありがとうございました。いただいた時間があつという間になくなってしまつて、でも来年もありますから、来年にとっておきたいと思います。それでは、ここまでで座談会を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

梅田：鎌田先生、長谷川先生、今井先生、それからご登壇された先生方どうもありがとうございました。

ⁱ 国立国会図書館の全国の図書館等と協同で構築している調べ物のためのデータベース。のちに学校事例としてDBから転載した時期がある。2023年12月で920館の参加、約31万件の登録データ、(R5年にはいつてから)月平均約334万件のアクセスがある。<https://crd.ndl.go.jp/jp/library/index.html> (2024年1月6日確認)

ⁱⁱ ・中山美由紀、村上恭子、吉岡裕子「授業に役立つ学校図書館データベースの構築—東京学芸大学における学校図書館の教員サポートのあり方—」『学校図書館』7112010.1, p.21-24

・平井文香「学校図書館運営専門委員会2年間の歩み」(第2回学校図書館シンポジウム 学校図書館の未

来 2009年4月23日) 『みんなで使おう! 学校図書館』平成21年度報告書, 資料2 (東京学芸大学リポジトリ) <https://u-gakugei.repo.nii.ac.jp/records/27068> (2024年1月22日確認)

iii 2000年以前から学校司書が配置されていたのは世田谷地区の小中高と、小金井小の4校のみ。その後小金井中、大泉中(現国際中等)、竹早小中(兼務)、大泉小に配置される。2015年、7校が5年の雇い止めのある大学非常勤職員に切り替わる。2018年、学校司書の雇い止めは撤廃。2020年竹早小と竹早中に司書が一人ずつ配置される。特別支援学校には文科省事業から月1~2回派遣。学校司書の勤務日数や勤務時間は学校によって違っているのが現状。

iv PC・スマートフォンとインターネットを利用した動画共有サイト。YouTubeと同様に、高額な資金や高度な技術を用いることなく動画を制作・放送できるが、違いはライブ配信ができることであった。2007年3月に米国で設立された同名の会社が運営。日本語版サイトは2010年4月に開設されたので、本PJ第1回報告会はその前の使用ということになる。2016年にIBM社に売却、2017年「IBM Cloud Video」に移行した。「知恵蔵」『コトバンク』 <https://kotobank.jp/word/Ustream-188814?fbclid=IwAR3mm34-M-idQntIj7-SmdoQB6pZrrAO2GgY9THCIGHTJWkI0g56oE9LRbY> (2024年1月22日確認)

「デジタル大辞泉」『コトバンク』
<https://kotobank.jp/word/U%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%A0-650842> (2024年1月22日確認)

v NPO法人知的資源イニシアティブ(IRI) <https://www.iri-net.org/about/syushi/> (2024年1月22日確認)

vi DBの「このサイトについて」内に「LOY2016 オーディエンス賞プレゼン」(今井福司先生作成)が、公開されている。https://www2.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/htdocs/?action=common_download_main&upload_id=6855 (2024年1月22日確認)

vii 「これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について(報告)」学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議 2014年3月31日 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/099/houkoku/1346118.htm (2024年1月6日確認)

viii みんなで使おう! 学校図書館 Vol.7: 「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」報告集: 平成27年度文部科学省事業 学校司書の資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する調査研究 2016年3月 (東京学芸大学 リポジトリ) <https://u-gakugei.repo.nii.ac.jp/records/33214> (2024年1月22日確認)

まずは、「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」事業（以下、データベース）の15周年を祝いたい。データベースをここまで大きく発展させるには、15年にわたって相当な労力を要したことは想像に難くない。それを本務のあるなかで取り組んでこられた学校図書館運営専門委員会の司書・司書教諭のみなさんをはじめ、東京学芸大学のデータベースに関わるすべてのみなさんには心より敬意を表したい。

さて、データベースの事業が始まってから15年の間に、学校教育を取り巻く環境は著しく変化した。

その最たるものが、「GIGA スクール構想」に代表される「教育の情報化」だろう。15年前には、学校における1人1台端末環境になっている15年後の学校の姿を想像できただろうか。学校図書館と1人1台端末環境を二項対立のように語る人もいるが、むしろ、学校図書館をより効果的に活用するためのツールとして1人1台端末をいかに活かしていくかを考え、実践につなげるほうがよい。私は、そう考えている。こうした実践についても、データベースではより一層力を入れて収集、蓄積、共有していったほしい。

ここ数年の生成系AIの急速な発展と普及も、間違いなく、これからの学校教育そして学校図書館に変化と影響をもたらすだろう。ランガナタンは「図書館の五法則」の1つに「図書館は成長する有機体」を挙げたが、変化をチャンスと捉え、学校図書館の成長・発展に活かせるかどうかがいま、そしてこれからの司書教諭や学校司書には求められている。

この15年の間でもうひとつ注目すべき動きは、読書バリアフリーに向けた法整備や施策が進んだことである。なかでも、2019年に「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」（以下、「読書バリアフリー法」）が制定されたことは大きかった。「読書バリアフリー法」では、学校図書館も施策の対象に含まれた。また、2021年に定められた「特別支援学校設置基準」では、「図書室」の設置義務が明示された。もともと「学校図書館法」では特別支援学校においても学校図書館は設置義務となっているが、全国の1割近い特別支援学校には学校図書館の設置がない現状にある（2019年度の全国SLA調査）。さらに、2023年に閣議決定された国の「第五次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」でも、基本的方針の1つとして「多様な子どもたちの読書機会の確保」が位置づけられた。ここにも「読書バリアフリー法」が関係している。

このように法整備や施策は進展したものの、学校図書館現場における読書バリアフリー環境の整備・充実はまだこれからという段階にある。特別な支援を必要とする児童生徒はすべての学校種で増加傾向にあり、特別支援学校はもちろん、すべての学校において学校図書館の読書バリアフリーはもはや必須とあってよい。法整備や施策は、学校図書館の現場に活かされてこそ、現場で実感できてこそ意味を持つ。国とともに各地の教育委員会にはぜひ頑張ってほしい。データベースにおいても、全国の学校図書館における読書バリアフリーの取り組みの好事例をぜひ積極的に収集、蓄積、共有していったほしい。

最後に、次の15年、さらにはその先を見据えて、データベースのますますの発展を期待している。

「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」の15年（「東京学芸大学学校図書館運営専門委員会」発足から）

西暦（年号）	主な活動	文科省事業名	学校図書館運営専門委員長名
2006（平成18）	文科省事業報告会 実践報告者 「東京学芸大学学校図書館運営専門委員会」設置要綱制定（平成19.2.7）	事業委員（50音順表記）	運営専門委員会構成人数 委員長 平井文香
2007（平成19）	「東京学芸大学学校図書館運営専門委員会」設置要綱改正施行（平成19.4.1）/中央大学附属中学校・高等学校見学		委員長 平井文香
2008（平成20）	東京学芸大学学校図書館運営専門委員会年4回実施 埼玉県立不動岡高等学校見学		委員長 平井文香
2009（平成21）	「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」スタート 開発担当：合資会社 風夢橋本健志 みんなでおおう！学校図書館Vol.1実施（データベース事業紹介/大泉小学校・大泉中学校リニューアール報告他）	学校図書館の活性化推進総合事業「教員のサポート機能強化に向けた学校図書館活性化プロジェクト」事業委員（鎌田和宏・成田喜一郎・野口武悟・長谷川正・前田稔）	委員長 五十嵐一郎 附属学校運営部4名、司書教諭・教諭13名 学校司書9名 大学図書館員12名（学校司書未配置だった大泉小に学校司書が入る）
2010（平成22）	マスコミキャラクターGAKUMO登場（デザインムラコエイコ） 附属特別支援学校への学校司書（田沼恵美子）の派遣始まる みんなでおおう！学校図書館Vol.2実施（実践報告 世田谷中学校教諭 渡邊裕/埼玉県立新座高等学校司書 宮崎健太郎/大泉小学校司書 小野寺愛美） ネットコモンズバージョンアップ トップ画面デザイン変更 情報リテラシー教育追加（後に読書・情報リテラシーに変更）、学校図書館トピックス追加 メールマガジン発行	確かな学力の育成に係る実践的調査研究「学校図書館の有効な活用方法に関する調査研究」 事業委員（鎌田和宏・成田喜一郎・西村昭子・野口武悟・長谷川正・長谷川優子・前田稔）	委員長 五十嵐一郎 附属学校運営部3名、学校司書教諭・教諭15名 学校司書9名 大学図書館員11名
2011（平成23）	みんなでおおう！学校図書館Vol.3実施（実践報告 特別支援学校教諭 野原隆弘/世田谷小学校司書教諭 堀井孝彦/竹早中学校副校長 荒井正剛/島根県松江市立揖屋小学校司書教諭 樋野義之・学校司書 門脇久美子）	事業委員（桂典子・鎌田和宏・成田喜一郎・野口武悟・長谷川優子・前田稔）	附属学校運営部3名、司書教諭・教諭14名 学校司書9名 大学図書館員3名
	公式Twitter Facebook開設 広報用カラーチャリン作成	確かな学力の育成に係る実践的調査研究「学校図書館の有効な活用方法に関する調査研究」	委員長 五十嵐一郎

2012 (平成24)	<p>みんなで使おう！学校図書館Vol.4実施 (実践報告 千葉県袖ヶ浦市立昭和中学校司書 和田幸子 & チーム学校図書館/東京都立狛江高校学校司書 千田つばさ)</p> <p>Webサイトトップページの更新 レファレンス共同データベースに参加</p>	<p>事業委員 (桂典子・鎌田和宏・高鷲忠美・成田喜一郎・野口武悟・長谷川優子・堀川照代・前田稔)</p> <p>確かな学力の育成に係る実践的調査研究「学校図書館担当職員の効果的な活用方策と求められる資質・能力に関する調査研究」</p>	<p>附属学校運営部3名、司書教諭・教諭13名 学校司書9名 大学図書館員4名</p> <p>委員長 山崎幸一</p>
2013 (平成25)	<p>みんなで使おう！学校図書館Vol.5実施 (実践報告 世田谷小学校司書教諭 堀井孝彦/大泉小学校司書教諭 山下美香/世田谷中学校司書教諭 菜原智美)</p> <p>学外からの実践事例を広く募集、年度末集計は学内事例142、学外事例77</p>	<p>事業委員 (桂典子・鎌田和宏・高鷲忠美・成田喜一郎・野口武悟・長谷川優子・藤井健志・堀川照代・前田稔)</p> <p>確かな学力の育成に係る実践的調査研究「学校図書館担当職員の効果的な活用方策と求められる資質・能力に関する調査研究」</p>	<p>附属学校運営部3名、司書教諭・教諭13名 学校司書10名 大学図書館員4名</p> <p>委員長 山崎幸一</p>
2014 (平成26)	<p>みんなで使おう！学校図書館Vol.6実施 (実践報告 世田谷小学校司書教諭 堀井孝彦・教諭 河野広和/特別支援学校司書教諭 野原隆弘/竹早中学校司書教諭 菊地圭子/附属高校司書教諭 加納隆徳)</p> <p>ネットコモンズバージョンアップ (2015.8) 使用方動画作成 (2016.1)</p>	<p>事業委員 (鎌田和宏・高鷲忠美・成田喜一郎・野口武悟・長谷川優子・藤井健志・前田稔)</p> <p>「学校司書の資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する調査研究」</p>	<p>附属学校運営部2名、附属学校司書教諭14名 学校司書9名 大学図書館員4名 事務担当1名</p> <p>委員長 山崎幸一</p>
2015 (平成27)	<p>みんなで使おう！学校図書館Vol.7実施 (実践報告 世田谷中学校教諭 渡邊裕/世田谷小学校司書教諭 居城勝彦/特別支援学校教諭 橋都由美子/国際中等教育学校司書教諭 工藤裕子/市川市教育センター 富永香羊子)</p> <p>事例目次の作成 Library of the Yearにて優秀賞受賞ならびにオーディエンス賞受賞 GAKUMO キャラクター・グランプリ審査委員会賞受賞</p>	<p>事業委員 (鎌田和宏・成田喜一郎・野口武悟・長谷川優子・藤井健志・前田稔)</p> <p>「学校司書の資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する調査研究」</p>	<p>附属学校運営部2名 司書教諭・教諭13名 学校司書9名 大学図書館員4名 事務担当1名 (この年より、7校で学校司書が大学の非常勤雇用になり替わる)</p> <p>委員長 山崎幸一</p>
2016 (平成28)	<p>みんなで使おう！学校図書館Vol.8実施 (実践報告 小金井中学校司書教諭 松原洋子/特別支援学校司書教諭 野原隆弘)</p> <p>新コンテンツ「活かそう司書のまなび-司書研修の報告」、 「GAKUMOのひみつ」から、ちよこつとアイデアア玉手箱-司書のお役立ち情報」誕生</p>	<p>事業委員 (井谷由紀・鎌田和宏・成田喜一郎・野口武悟・野原隆弘・長谷川優子・藤井健志・前田稔)</p> <p>「学校司書の資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する調査研究」</p>	<p>附属学校運営部2名、司書教諭・教諭13名 学校司書8名 大学図書館員4名 事務担当1名</p> <p>委員長 古家真</p>
2017 (平成29)	<p>みんなで使おう！学校図書館Vol.9実施 (実践報告 世田谷小中学校図書館紹介/ 特別支援学校図書館での支援のあゆみ)</p> <p>「児童・生徒の作品」項目を追加 サイト用パンフレットリニューアル</p>	<p>事業委員 (鎌田和宏・成田喜一郎・野口武悟・野原隆弘・長谷川優子・藤井健志・前田稔)</p> <p>「学校図書館ガイドラインを踏まえた学校図書館の利活用に係る調査研究」</p>	<p>附属学校運営部3名、司書教諭・教諭13名 学校司書8名 大学図書館員4名 事務担当1名</p> <p>委員長 古家真</p>
2018 (平成30)			

	みんなので使おう！学校図書館Vol.10実施（実践報告）世田谷小学校司書教諭 梅田翼/小金井中学校司書教諭 数井千春/竹早中学校 荻野聡/世田谷中学校司書教諭 桑原智美/附属高校司書教諭 居城勝彦/国際中等教育学校教諭 浅井悦代)	事業委員（鎌田和宏・野口武悟・長谷川優子・藤井健志・前田稔）	附属学校運営部2名 司書教諭・教諭 12名 学校司書8名 大学図書館員4 名 事務担当1名（学校司書の5年の 雇止めが撤廃）
2019（令和1）	年間アクセス数目標10万を超える28万アクセス達成 10周年記念GAKUMOシリーズ作成 みんなので使おう！学校図書館Vol.11実施（実践報告）小金井中学校司書教諭 数井千春/世田谷中学校教諭 渡邊裕	「学校図書館ガイドラインを踏まえた学校図書館の利活用に係る調査研究」 事業委員（鎌田和宏・野口武悟・長谷川優子・藤井健志・前田稔）	委員長 古家眞 附属学校運営部2名、司書教諭・教諭 14名 学校司書9名 大学図書館員3 名 事務担当1名 委員長 古家眞
2020（令和2）	「データベースの使い方動画 2.0」へのリニューアル・公開（株）カーリル代表吉本龍司の協力のもと学大総合OPAC誕生 みんなので使おう！学校図書館Vol.12実施（実践報告）世田谷小学校司書教諭 梅田翼/大泉小学校司書教諭 山下美香/世田谷中学校教諭 渡邊裕/特別支援学校司書教諭 野原隆弘)	事業委員（今井福司・鎌田和宏・野口武悟・長谷川優子・前田稔）	附属学校運営部2名、司書教諭・教諭 12名 学校司書9名 大学図書館員3 名 事務担当1名（附属竹早小学校に、小学校司書と中学校司書が配置 される） 委員長 古家眞
2021（令和3）	学大総合OPAC「GAKUMOPAC」一般公開 みんなので使おう！学校図書館Vol.13実施（実践報告）世田谷小学校司書教諭 梅田翼/世田谷中学校司書教諭 関野かなえ・教諭 渡邊裕/国際中等教育学校司書教諭 渡津光司)	学校図書館の活性化に向けた調査研究 事業委員（今井福司・鎌田和宏・野口武悟・長谷川優子・前田稔）	委員長 古家眞 附属学校運営部2名、司書教諭・教諭 12名 学校司書9名 大学図書館員3 名 事務担当1名
2022（令和4）	2022.4～7月まで、サイトの更新がストップ（大学全体のサーバ更新の影響） みんなので使おう！学校図書館Vol.14実施（実践報告）小金井小学校司書教諭 西岡里奈/世田谷中学校司書教諭 関野かなえ/附属高校司書教諭 田中義洋)	読書活動推進事業：学校図書館図書の購入促進事業 事業委員（今井福司・鎌田和宏・野口武悟・長谷川優子・前田稔）	委員長 古家眞 附属学校運営部2名、司書教諭・教諭 12名 学校司書9名 大学図書館員3 名 事務担当1名
2023（令和5）	「データベースサイトのリニューアル（ネットコメントから移植）BookReachとの連携」 みんなので使おう！学校図書館Vol.15実施（実践報告）国際中等教育学校教諭 川上佑美/特別支援学校教諭 堀田椋	読書活動推進事業：学校図書館図書の購入促進事業 事業委員（今井福司・鎌田和宏・野口武悟・長谷川優子・前田稔）	委員長 古家眞 附属学校運営部2名、学校司書教諭・ 教諭13名 学校司書9名 大学図書館 員3名 事務担当1名

【資料】

司書教諭 : 梅田 翼	司書 : 金澤 磨樹子 (週5日)	
開館時間 : 8:15~16:15	授業での使用時間 : 18時間/週+不定期利用	
児童・生徒数 : 608名	学級数 : 18学級	教職員数 (含非常勤) : 73名
蔵書冊数 : 20,282冊	床面積 : 160 m ²	座席数 : 40席
4-12月貸出冊数 : 34,159冊	児童・生徒の平均貸出数 : 56冊/人	
年間予算 : 185万円 (含消耗品・教員図書・図書館システム運用代)		
購読新聞 : 2紙	「朝日小学生新聞」「毎日小学生新聞」	
購読雑誌 : 6誌	「月刊NEWSがわかる」「子供の科学」「月刊ジュニアエラ」他	
オンラインデータベース :	電子書籍サービス Yomokka!	
インターネット環境 :	無線LAN	電子図書館 未導入
情報機器・設備 :	管理用PC 1台 / 検索性iPad 4台 / ノートPC (司書用) 1台 / iPad 司書用1台 / 大型モニター 1台 / ホワイトボード 2台	
貸出管理ソフト :	情報館	書誌データ入力方法 : NDL 蔵書目録から取り込み
学外のお機関との連携協力体制 : 世田谷区立図書館 (団体貸出) (株) カーリル		

【令和5年度の活動】

- ・メディアの時間1・2年生は、classで、3年生以上は国語の時間に毎週割り当てられている。
- ・1年生・・・図鑑の利用指導・読書ノートの開始
- ・2年生・・・メディアルームで秋探し (秋に関する本を探し、紹介する) / 図鑑の利用指導 (復習)
- ・3年生・・・ポプラディア利用指導 / 『おすすめの本10冊チャレンジ』のリスト配布
- ・4年生・・・『おすすめの本10冊チャレンジ』のリスト配布 / 交換読書 / シリーズ大作戦
- ・5年生・・・岩波少年文庫を読んで紹介文を書く / 交換読書 / 世田谷オーディブル / シリーズ大作戦
- ・6年生・・・『ノンフィクション50冊』のリスト配布
- ・低・中・高学年向けに「図書新聞」を、教員向けに「おとなの図書新聞」を発行
- ・給食室とコラボ 11月『給食のメニューに関する本の紹介』
- ・ラボの時間 (個人での探求時間) でのレファレンスや資料提供



司書教諭：西岡 里奈	司書：松岡 みどり (週5日)	
開館時間：8:30~15:30	授業での使用時間：18時間/週+不定期利用	
児童・生徒数：618名	学級数：18学級	教職員数(含非常勤)：37名
蔵書冊数：24,759冊	床面積：77㎡(※)	座席数：6席(※)
4-12月貸出冊数：21,316冊	児童・生徒の平均貸出冊数：34冊/人	
年間予算：120万円 (図書費・消耗品費)		
購読新聞：2紙 「朝日小学生新聞」「読売 KoDoMo 新聞」		
購読雑誌：4誌 「月刊NEWSがわかる」「月刊ジュニアエラ」「Newton」「たくさんのふしぎ」		
オンラインデータベース：1件 電子書籍サービス「Mottosokka！」		
インターネット環境：LANケーブル	電子図書館：未導入	
情報機器・設備：管理用PC 1台 / 検索性PC 2台 書画カメラ 1台 / 黒板 1台		
貸出管理ソフト：LS@SCHOOL	書誌データ入力方法：TOOLi-SよりMARCダウンロード	
学外他機関との連携協力体制：小金井市立図書館(団体貸出・学級貸出)(株)カーリル		

【令和5年度の活動】

(※) 令和5年9月より校舎改修工事に伴い、仮教室で運営中。読書スペースとして、図書の時間には教室・家庭科室も利用している。

- ・司書教諭による電子書籍の利用指導、分類の学習
- ・PowerPoint でおすすめの本紹介スライド作成(3年)
- ・ビブリオバトルの実施(2年、4年)
- ・大学図書館訪問と見学(6年1クラス)
- ・図書委員会による本、図書館に親しむための企画実施
- ・横山英史子栄養教諭との「おはなし献立」の実施。「おはなし献立」に関連する図書の展示
- ・単元のテーマに関連した図書のクラス貸出
- ・モニターと書画カメラを使用している絵本読み聞かせ(2年)



司書教諭 : 宮崎 佐智子	司書 : 宮崎 伊豆美 (週4日:火~金曜)	
開館時間 : 9:30~16:30	授業での使用時間 : 12時間/週+不定期利用	
児童・生徒数 : 409名	学級数 : 12学級	教職員数 (含非常勤) : 25名
蔵書冊数 : 13841冊 (小中計27993冊)	床面積 : 280㎡	座席数 : 50席 (最大80席)
4-12月貸出冊数 : 18131冊	児童・生徒の平均貸出数 : 44冊/人	
年間予算 : 100万円 (含消耗品・図書館システム運用代)		
購読新聞 : なし (中学購入新聞閲覧可能)	購読雑誌 : なし	
オンラインデータベース : 電子書籍サービス Mottosokka!		
インターネット環境 : 無線LAN	電子図書館 : 未導入	
情報機器・設備 :	管理用PC 小中各1台 / 検索用PC 1台 / 複合機 1台 / ホワイトボード 3台 / (大型モニター、プロジェクター借用中)	
貸出管理ソフト : LS@SCHOOL	書誌データ入力方法 : TOOLi-SよりMARCダウンロード	
学外のお他機関との連携協力体制 : 文京区立図書館 (団体貸出) (株)カーリル(簡易OAPC作成) ポプラ社		

【令和5年度の活動】

- ・4月全クラスにオリエンテーション実施(2・3年:分類、4年:百科事典、5年:年鑑、6年:出典)
- ・全クラス週1回メディアの時間に、読み聞かせ・ブックトーク・テーマ読書など実施。
- ・「メディアセンター便り」の発行 ・おはなし給食支援 (毎月1回)
- ・デジタルプラットフォーム「竹早ライブラリー」の管理、更新
- ・授業資料支援:1年「いきものかくれんぼ」「はたらく自動車」「雑草」/2年「ことばあそび」「レオ・レオニ」「図鑑の使い方」「詩」/3年「百科事典の使い方」「生きもの図鑑」「世界の昔話」/4年「環境」「ゴミ」/5年「重松清」「伝記」「椋鳩十」「地震防災」/6年「森絵都」「宮沢賢治」「AI」
- ・保護者おはなし会 (全クラス年3回)



司書教諭 : 山下 美香	司書 : 富澤 佳恵子 (週5日)	
開館時間 : 8:00~16:30	授業での使用時間 : 12時間/週+不定期利用	
児童・生徒数 : 578名	学級数 : 22学級	教職員数 (含非常勤) : 59名
蔵書冊数 : 13,896冊	床面積 : 160㎡	座席数 : 44席
4-12月貸出冊数 : 15,848冊	児童・生徒の平均貸出数 : 27冊/人	
年間予算 : 110万円 (含消耗品・教員図書・図書館システム運用代)		
購読新聞 : 2紙	「朝日小学生新聞」「読売 KoDoMo 新聞」	
購読雑誌 : 2誌	「月刊 NEWS がわかる」「子供の科学」	
オンラインデータベース : 0件		
インターネット環境 : 無線LAN	電子図書館 : 未導入	
情報機器・設備 : 管理用PC 1台/検索用PC 1台/児童用タブレット 5台/司書用iPad 1台/ 児童用iPad 3台/複合機 1台/ホワイトボード 3台/モニター 1台/書画カメラ 1台		
貸出管理ソフト : 図書丸ねっと	書誌データ入力方法 : TOOLi-S, JAPAN/MARC より MARC ダウンロード	
学外のお機関との連携協力体制 : 練馬区立図書館 (団体貸出、連絡協議会) (株) カーリル		

【令和5年度の活動】

- ・読み聞かせ : 2学期よりお話のコーナーでの読み聞かせを再開
1学期より国際学級への司書による読み聞かせを再開
- ・「図書だより」の発行 (司書教諭、学校司書で分担して執筆)
- ・オリジナル読書記録の取り組み : 1年・2年 (ファイル式) / 3年・4年・5年・6年 (ノート式)
- ・授業支援 : 1年国語「くちばし」「うみの かくれんぼ」「じどう車くらべ」「どうぶつの 赤ちゃん」(資料用意) / 2年探究プログラム「私たちがりようする場所は、人がつくったシステムとわたしたちの心によってしんかしている」(資料用意・調査補助) / 3年国語「図書館たんていだん」(指導補助) / 4年探究プログラム「多様な立場や意見を知ろうとすることで公正な決定に近づく」(教員への資料提供) / 5年探求プログラム「異なる価値観との出会いが自己の成長を促す」(教員への資料提供・ブックトーク) / 6年国語「私と本」(児童によるブックトークの指導補助・ブックトーク実演・調査補助)



司書教諭 : 阿部 由美	司書 : 村上 恭子 (週5日)	
開館時間 : 8:30~16:30	授業での使用時間 : 128時間/年	
児童・生徒数 : 410名	学級数 : 12学級	教職員数 (含非常勤) : 42名
蔵書冊数 : 24,017冊	床面積 : 144㎡	座席数 : 40席
年間貸出総数 : 3,485冊(12月末)	児童・生徒の平均貸出冊数 : 8.3冊/人	
年間予算 : 200万円 (含消耗品)		
購読新聞 : 2紙 「東京新聞」「朝日中高生新聞」		
購読雑誌 : 11誌 「月刊ジュニアエラ」「Newton」「鉄道ファン」「スクリーン」他		
オンラインデータベース : 2件 「スクールヨミダス」「ルール電子図書館」		
インターネット環境 : 無線LAN	電子図書館 「LibrariE」	
情報機器・設備 :	管理用PC 1台 / 検索性PC 1台 / iPad 37台 / PC 2台 / コピー機 1台 / 大型ディスプレイ 1台 / ホワイトボード 2台	
貸出管理ソフト : 情報館	雑誌データ入力方法 : NDL蔵書目録からの取り込み	
学外の他機関との連携協力体制 : 世田谷区立図書館 (団体貸出) カーリル (GAKUMOPAC)		

【令和5年度の活動】

- ・4月 1年生オリエンテーション 2年生 タイトル五行歌づくり (国語)
- ・5月 1年生新聞投書始まる。「チャットGPT、君なら使う？」(社会科) 心に刺さる論語 (3年国語)
- ・6月 著作権特別講義 前附属世田谷中教諭原口直先生によるオンライン講座 対象 図書委員会
- ・7月 デイバートのための資料探し (3年社会科) 自分の好きなジャンルで説明文を書こう (1年国語)
- ・10月 「幼児の成長と絵本」(3年家庭科) →保育園児に読み聞かせを実施
「新書回転寿司」(3年国語科) 翌月2年でも実施
- ・11月～「ことばのけもの」(2年美術) 3学期まで 「チャレンジ! 生徒授業II」(2年社会科)
- ・ブックカフェ実施 校長先生の教育学トーク 不定期で開催中 主催図書委員会 対象一般生徒
- ・芸術発表会 ドイツや教育に関する本やレポートの展示



東京学芸大学附属小金井中学校 図書館

(令和5年12月末現在)

司書教諭 : 数井 千春	司書 : 長友 春陽 (週5日)		
開館時間 : 10:00~17:00	授業での使用時間 : 113時間/年		
児童・生徒数 : 420名	学級数 : 12学級	教職員数 (含非常勤) : 40名	
蔵書冊数 : 16,246冊	床面積 : 136㎡	座席数 : 44席	
4-12月貸出冊数 : 1,864冊	児童・生徒の平均貸出数 : 4冊/人		
年間予算 : 129万円 (含消耗品、備品、システム代)			
購読新聞 : 3紙	「産経新聞」「毎日新聞」「読売新聞」(「朝日新聞」は教員室で購入)		
購読雑誌 : 3誌	「月刊NEWSがわかる」「ナショナルジオグラフィック 日本版」「Number」		
オンラインデータベース : 0件			
インターネット環境 : LANケーブル	電子図書館	未導入	
情報機器・設備 :	管理用PC 1台 / 検索性PC 1台 業務用PC 1台 / ホワイトボード 1台		
貸出管理ソフト : 情報館	書誌データ入力方法 : NDL蔵書目録からの取り込み		
学外他機関との連携協力体制 : 小金井市立図書館 (団体貸出) (株)カーリル			

【令和5年度の活動】

- ・司書教諭とともに1年生向けにオリエンテーションを4月に実施。
- ・図書館学の実習生の展示の実施
- ・教育実習生の図書館見学、授業内で紹介する本の貸し出し
- ・授業への協力：国語（万葉集、平家物語、読書に乗ろう）、私の主張発表会の発表原稿づくりの際の資料提供、社会、美術（自由制作の題材探し）、総合学習（修学旅行の事前学習）、課題研究、英語（多読）、保健体育（健康と環境等）
- ・展示（新着本、課題図書等）
- ・図書委員会による活動（常時活動のほか学芸発表会での展示、キャンペーンの開催、おすすめ本の紹介、本の福袋の作成・貸出）



東京学芸大学附属竹早中学校 メディアセンター(小中共用)

(令和5年12月末現在)

司書教諭 : 荻野 聡	司書 : 中村 誠子 (週5日)	
開館時間 : 10:00~16:00 放課後開館の日は16:45まで	授業での使用時間 : 92時間/年(教室支援含む)	
児童・生徒数 : 425名	学級数 : 12学級	教職員数(含非常勤) : 39名
蔵書冊数 : 14,351冊 (小中計28,178冊)	床面積 : 280㎡	座席数 : 50席(最大80席)
4-12月貸出冊数 : 1,599冊	児童・生徒の平均貸出数 : 3.8冊/人	
年間予算 : 120万円 (別途環境整備費)		
購読新聞 : 1紙	「朝日新聞」(予算外)	
購読雑誌 : 6誌	「Newton」「鉄道ファン」「ダ・ヴィンチ」 「SportsGraphic Number」「ジュニアエラ」「アニメージュ」	
オンラインデータベース : 未導入		
インターネット環境 : 無線LAN	電子図書館 : 未導入	
情報機器・設備 :	管理用PC 小中各1台 / 検索用PC 1台 / 生徒用タブレット 5台 複合機 1台 / ホワイトボード 2台 / 大型モニター 1台	
貸出管理ソフト : LS@SCHOOL	書誌データ入力方法 : TOOLi-SよりMARCダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制 : 文京区立図書館(団体貸出) (株カーリル(簡易OPAC))		

【令和5年度の活動】

《1年生》総合「校外学習：白馬・信州について調べる」/社会「鎌倉時代の成立年代を考える」
 《2年生》美術「光の中の記憶」/社会「日本の諸地域を調べる」
 《3年生》国語「古典発展学習：デジタル資料を活用した古典作品紹介」
 国語「ココプロ：国語科個人研究プロジェクト」
 《図書委員会》文化研究発表会への参加/広報紙の作成/国立大学附属学校図書委員会交流会への参加
 《その他》全校生徒の自由研究・卒業論文支援/館内イベント実施/
 他校国語科授業(ビブリオバトル)有志生徒参加/デジタルプラットフォーム作成 など



司書教諭 : 野島 淳司	司書 : 渡邊 有理子 (週5日)	
開館時間 : 9:00~17:00	授業での使用時間 : 319時間	
児童・生徒数 : 727名	学級数 : 24学級	教職員数 (含非常勤) : 99名
蔵書冊数 : 29,763冊	床面積 : 326㎡	座席数 : 50席
4月 - 12月貸出数 : 3,176冊	児童・生徒の平均貸出冊数 : 前期生 : 4.8冊/人 後期生 : 3.9冊/人	
年間予算 : 230万円	(含消耗品・電子図書館コンテンツ費)	
購読新聞 : 6紙	「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」「東京新聞」 「The Japan Times Alpha」「The New York Times」	
購読雑誌 : 17誌	「Newton」「ソトコト」「芸術新潮」「TIME」「The Economist」他	
オンラインデータベース : 3件	「朝日けんさくくん」「理科年表」「化学書資料館」	
インターネット環境 : 無線LAN	電子図書館 : OverDrive	
情報機器・設備 :	管理用PC 1台 / 検索性PC 2台 / 生徒用ノートPC 35台 iPad 1台 / HD液晶パネル 6台 / ホワイトボード 3台	
貸出管理ソフト : 情報館	書誌データ入力方法 : NDL蔵書目録からの取り込み	
学外その他機関との連携協力体制 :	練馬区立図書館 (団体貸出、連絡協議会)、国立国会図書館	

【令和5年度の活動】

中1 : 生物「校庭の植物を調べよう!」「脊椎動物調べ」
 中2 : 日本文化探訪「能と狂言」
 中3 : 国際教養「沖縄フィールドワーク調査」英語「生命倫理」「フォトジャーナルで見る21世紀」
 高1 : 国際教養「小児医療と海外における医療支援」国語「ハンセン病」「働く・労働」
 高2 : 歴史「スペイン内戦」「日中戦争」文学「イブセン『人形の家』とその時代」
 高3 : 文学「文学は戦争を抑止するのか」(成果物を館内展示)
 ≪図書委員会≫ 委員会として企画書を作成し、インスタグラムを開設。



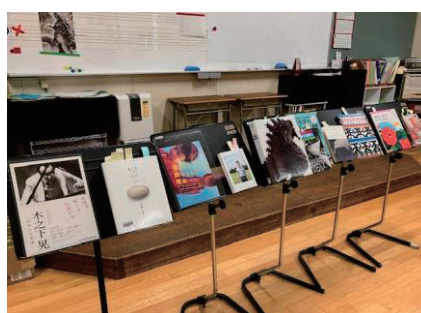
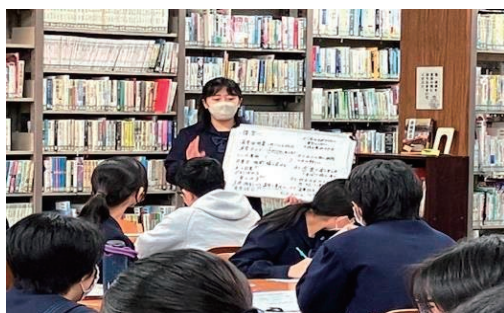
東京学芸大学附属高等学校 図書館

(令和5年12月末現在)

司書教諭 : 来原 智美	司書 : 岡田 和美 (週5日)	
開館時間 : 9:30~16:45	授業での使用時間 : 100時間/年+不定期利用	
児童・生徒数 : 951名	学級数 : 24学級	教職員数 (含非常勤) : 88名
蔵書冊数 : 31,200冊	床面積 : 359.25 m ²	座席数 : 140席
年間貸出総数 : 2,370冊	児童・生徒の平均貸出冊数 : 3冊/人	
年間予算 : 400万円 (含消耗品・教員研究図書)		
購読新聞 : 5紙	「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」「日本経済新聞」「The Japan Times」	
購読雑誌 : 65誌	「日経サイエンス」「Newton」「芸術新潮」「数学セミナー」「遺伝」他	
オンラインデータベース : 1件	「朝日けんさくくん」	
インターネット環境 : 無線LAN		
情報機器・設備 :	管理用 PC 3台 / 検索性 PC 8台 / プロジェクター 1台 / 大型ディスプレイ 2台 / ホワイトボード 2台	
貸出管理ソフト : 情報館	書誌データ入力方法 : Tooli-s より MARC ダウンロード	
学外との他機関との連携協力体制 : 世田谷区立図書館 女性教育情報センター 防災専門図書館 国会図書館 東京都立中央図書館		

【令和5年度の活動】

- ・ 第22回公開教育研究大会 芸術科 (音楽1) 太平洋地域の音楽に親しもう 資料支援
- ・ 地歴公民 (地理総合) 地形から災害の可能性を考える 資料支援
- ・ 家庭科 (家庭科基礎) 金融教育と家庭科 資料支援
- ・ 国語 (文学国語) 夏目漱石『こころ』分析のキーワード 資料支援
- ・ ブックトーク授業実施 芸術 (音楽1) 「自分自身の音楽史 音楽との出会い」
- ・ 学芸大学教育実習生図書館活用授業支援・図書館オリエンテーション
- ・ 保健体育図書館活用支援 (精神疾患・依存症・ガン・交通安全・糖尿病他)
- ・ 探究授業支援・指導、関連資料の選書および受け入れ
- ・ 授業支援 「公民 新聞を読み解く」「美術鑑賞と古典」「和歌を読み解く」「免疫とは何か」「カルメン」
「作曲 PC を活用した創作活動～相互批評によるブラッシュアップ」「環境と地理」他
- ・ 「先生のための学校図書館データベース」事例12件掲載



東京学芸大学附属特別支援学校 プレイルーム (幼稚部図書コーナー)
 個別学習室Ⅱ (小学部図書コーナー)
 ランチルーム (中学部図書コーナー)
 生徒会室 (高等部図書コーナー)

(令和5年12月末現在)

司書教諭 : 野原 隆弘 (中学部)	司書 : 宮崎 伊豆美 (年17日)	
開館時間 : 8:30~15:30	授業での使用時間 : 2時間 (特設) / 年	
児童・生徒数 : 幼稚部 4名 小学部 17名 中学部 19名 高等部 29名	学級数 : 幼稚部 1学級 小学部 3学級 中学部 3学級 高等部 3学級	教職員 (含非常勤): 幼稚部 4名 小学部 9名 中学部 8名 高等部 12名
蔵書冊数 : 幼稚部 70冊 小学部 702冊 中学部 417冊 高等部 574冊	床面積 : 幼稚部 16㎡ 小学部 16㎡ 中学部 10㎡ 高等部 16㎡	座席数 : 幼稚部 0席 小学部 0席 中学部 0席 高等部 4席
年間貸出 総数 : 計測不能	児童・生徒の平均貸出冊 数 : 計測不能	
年間予算 : 0円		
購読新聞 : 0紙	購読雑誌 : 0誌	オンラインデータベース : なし
インターネット環境 : 無線LAN	IT図書室 (授業用)	電子図書館 : 未導入
情報機器・設備 : 事務用PC 1台 / 検索用PC 0台 インターネット閲覧用PC 10台 (IT図書室)		
貸出管理ソフト : なし (ブラウン式)	書誌データ入力方法 : Excel 原簿手入力	
学外その他機関との連携協力体制 :	東久留米市立図書館 (団体貸出) (株) カーリル (OPAC 作成)	

【令和5年度の活動】

- ・ 図書の整理、寄贈本受入れ・配架、
- ・ 小・中・高でのブラウン式貸出、保護者へのおうち貸出
- ・ 小学部資料支援 (絵本集会、鎌倉、クリスマス)
- ・ 中学部の総合学習支援 (地域探検、東京探検)
- ・ 高等部資料支援 (北海道、気持ちを表す言葉)
- ・ マルチメディア DAISY 図書整備
- ・ 図書館だより発行
- ・ 小・中・高図書コーナーの季節の飾り、
- ・ 蔵書データ整理、カーリル OPAC 制作・公開



東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎

本園の各保育室には絵本棚が常設してあり、子どもたちの発達や季節、行事に合った絵本や図鑑を適宜入れ替えながら置いている。子どもたちはそれらを生活の中で自由に手に取ることができる。日々の降園時には、教師が物語、昔話、科学絵本など様々なジャンルの絵本や紙芝居の読み聞かせを行い、新しい本との出会いや、教師や友達と面白さを共有する機会となっている。そうした共有体験はごっこ遊びの中で再現されたり、自然物に触れた時の新たな視点や発見につながったりしている。



また、保護者活動である図書部による絵本の読み聞かせや公演も行っている。さらに、家庭でも本に親しんだり、保護者と楽しんだりする機会がもてるように、月間絵本の購読や、絵本の貸し出しを行っている。絵本の貸し出しワゴン子どもたちの靴箱付近に設置し、手に取りやすい環境であることで、保護者も子どもと一緒に選んで借りることを楽しんでいる姿が見られる。今後も、幼児が絵本を通してお話の世界を楽しんだり、知見を広めたりできるような取り組みを継続し、保護者との連携を図りながら図書活動の充実に努めていきたい。

東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎



本園には、絵本の部屋があります。蔵書の中から発達や季節、保育内容に合わせて絵本や図鑑を選び、保育室の本棚に置いたり、担任が毎日読み聞かせを行ったりしています。遠足で水族館に行く前には、絵本に登場するペンギンから手紙が届いたり、海の生き物の本コーナーを設けたり、図書に親しみを持ちながら、子どもたちの興味や活動に対する期待感が膨らんでいくような取り組みをしています。また、各学年で絵本の貸出も定期的に行っています。子どもたちが自分

で好きな絵本を選んで持ち帰り、保護者と一緒に楽しんでいます。幼稚園で読み聞かせしてもらった絵本を「また読みたい」と言って借りる子どもも多いです。貸出の際は保護者の方に当番としてご協力をいただき、子どもと保護者、園と保護者の交流にもつながっています。

令和5年度 附属間相互貸借データ一覧

2023年12月末現在

受入校 \ 貸出校	世小	世中	附高	金幼	金小	金中	竹小中 (含竹幼)	泉小	国際中等	特別支援	附属 図書館	運営専門 委員会 【布絵本】	合計
世小		5	23		0	0	0	0	1				29
世中	80		33		0	0	47	0	42		12		214
附高	1	1			1	0	3	2	1		8		17
金幼	0	0	0		0	0	0	0	0				0
金小	0	0	0			0	7	0	0				7
金中	4	6	27		0		22	0	0				59
竹小(含竹幼)	0	2	0		0	0		0	0				2
竹中	1	19	5		0	3		0	8		3		39
泉小	0	0	0		0	0	0		35		3		38
国際中等	0	1	3		0	0	1	5			79		89
特別支援	3	10	4		0	0	27	10	3				57
附属図書館	0	0	0		0	0	0	0	0				0
附属学校課・支援室	0	0	0		0	0	0	0	0				0
大学催し／研究室	38	0	0		7	0	0	0	0				45
合計	127	44	95	0	8	3	107	17	90	0	105	0	596

596

■活動の記録 ～会議等～

〈会 議〉

○学校図書館事業委員会

- 第1回 7月31日(月) Teamsによるオンライン会議
・今年度の事業内容について・事業委員の先生からの御指導

○学校図書館運営専門委員会

- 第1回 4月20日(木) Teamsによるオンライン会議
・今年度の活動について・報告会の開催方法について
- 第2回 11月7日(火)Teamsによるオンライン会議
・報告会について・報告集について
- 第3回 3月26日(火) Teamsによるオンライン会議(予定)
・今年度の反省 来年度の文科省事業について他

○学校図書館運営専門委員会 司書部会 (全11回)

(今年度の司書部会は第3回、第4回、第11回は対面、他はオンラインで行った)

第1回	4月26日(水)	各校の近況報告 DBの分担 7月司書研修について
第2回	5月24日(水)	各校の近況報告 7月司書研修 データベースリニューアルについて
第3回	6月21日(水)	各校の近況報告 7月司書研修 文科省事業について データベースリニューアルについて
第4回	8月10日(木)	教材検索システム「BookReach」ワークショップ
第5回	9月20日(水)	各校の近況報告 7月司書研修ふりかえり JAPAN SEARCH 学習会 各校の授業実践と報告会について
第6回	10月25日(水)	各校の近況報告 文科省事業について 運営専門委員会について 就業規則について
第7回	11月8日(水)	各校の近況報告 文科省事業報告会に向けて
第8回	12月12日(火)	文科省事業報告会について 報告集について データベースリニューアルについて
第9回	1月24日(水)	各校の近況報告 報告会ふりかえり 報告集について 風夢橋本さんを迎えてデータベースリニューアルについて
第10回	2月7日(水)	各校の近況報告 報告書・報告集について 次年度の司書研修について 次年度の分担について データベースリニューアルについて
第11回	3月26日(火)	報告集について 次年度の活動について (予定)

〈研 修〉

- 7月25日(火)「学びを支援する学校図書館をつくろう! アナログ編」
7月27日(木)「学びを支援する学校図書館をつくろう! デジタル編」

〈特別支援学校司書派遣日〉※全17回中9回分を文科省事業予算で派遣

4月10日(月),5月8日(月),5月22日(月),6月9日(金),6月19日(月),7月3日(月),7月10日(月),
9月4日(月),9月25日(月),10月16日(月),11月6日(月),12月4日(月),1月15日(月),2月5日(月),
2月18日(日),3月4日(月),3月18日(月) (全17回)

*平成22年度より、学校司書を派遣。

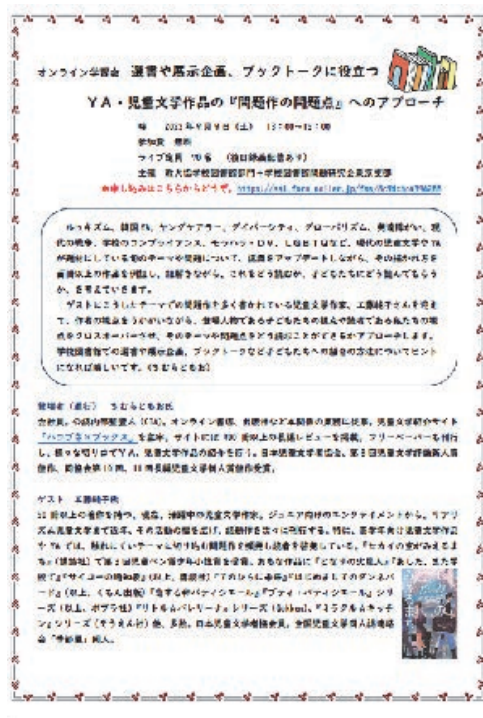
日本教育大学協会学校図書館部門活動報告

日本教育大学協会学校図書館部門は、学校図書館学と関係する研究者の研究環境の充実、全国の附属学校及び附属学校図書館との連携・協働、教育学全領域の研究者への啓発と相互交流という3つの目標を掲げて、2009年に設立された。当初は、メールマガジンの発行や、デジ読評価プロジェクト等の活動に軸足を置いて活動していたが、プロジェクトが終了後は、教員養成大学の附属学校における学校司書間の人的ネットワークづくりに重点をおいた活動を行っている。関東圏の国立附属学校司書がほとんどだが、今年度奈良教育大学附属学校司書が加わり、現在は24名の学校司書が情報交流を年に数回行っている。また、「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」への記事の執筆や、事例提供にも協力頂いている。2023年11月の「今月の学校図書館」には、奈良教育大学附属中学校の学校図書館の活動を執筆いただいた。

令和5年度は、学校図書館問題研究会東京支部との共催で「YA・児童文学作品の『問題作の問題点』へのアプローチ」というテーマでオンライン学習会を開催した。講師は、児童文学作品を未来に語り継ぐための紹介サイト「ハコブネ×ボックス」を主宰するきむらともお氏、特別ゲストに児童文学作家工藤純子氏をお迎えした。当日の参加者は90名、見逃し配信には198名の申し込みがあり、このテーマへの関心の高さが伺えた。参加後のアンケートも69名の方から、熱い書き込みがあり、学校司書がYA世代に向けて書かれた作品について学んだり語り合える場のニーズを感じた。

また、今回はきむらさんサイドからも、オンライン学習会の案内をしてくださった関係で、学校図書館関係者向けの学習会ではあったけれども、児童文学作家をはじめ、ひろく児童文学作品に関心のある方も参加していたことが特徴的であった。「今後は、学校司書・作家・出版社・流通関係の方々などともつながり、学べる場ができるといいのでは」というきむらさんからの提案があった。特別ゲストとして参加された工藤純子さんにとっては、ご自分の書いた本がどのように読まれているかを知る機会になり、また、学校司書側はどのような思いで書かれたかを知る機会となって、双方とも満足できる学習会だった。

毎年この「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」報告集を学校図書館部門の活動費からも捻出して増刷をしているが、今後はこの冊子をまだつながりがない学校司書がいる国立附属学校に送り、学校図書館への理解を深めていただき、学校図書館部門への活動に参加していただけるよう働きかけていきたい。



(文責：日本教育大学協会学校図書館部門代表 東京学芸大学教授 前田 稔
副代表 東京学芸大学附属世田谷中学校司書 村上 恭子)

おわりに ー生成系 AI と図書館ー

東京学芸大学学校図書館運営専門委員会 委員長 古家 眞

大学の授業で、こんな話をしました。「授業のまとめとして皆さんに小論文を提出してもらいます。生成系 AI は活用してもよいのですが、『小論文執筆』をさせてはいけません。」私が出した小論文のテーマを生成系 AI の一つに入力してみると、「それなりの表現で、よく調べ考えた学生が書いたのではなにか」という論文が出来上がります。しかし、読み返してみると文章が無機質で学生特有の息遣いが伝わってきません。それは、「一定の知識をもとにして誰にでも書けそうなことを正確に述べているから」だと感じたからです。個性や感情が無い文章なのです。

そこで、次に「中学校教員になろうとする立場で述べてください」と入力すると、生成系 AI は「最後に、生徒たちが自己を超え、目標を達成する手助けをする役割を果たすことを楽しみにしています」という表現をしました。条件設定によってはやはりそれなりの論文も書いてしまいます。

本学でも、学生や教職員に「生成系 AI 使用における注意」を通知していますが、一方で、学校教育の現場で効果的に生成系 AI を活用していこうという動きもみられています。学校行事の効率的な運営やプログラム作成について、設定した条件に見合った提案をしてくれます。しかも、わずか1分程度の時間しか費やしません。このことについてある公立中学校の先生と「自分が教員として生成系 AI を使って夏休み中の部活動運営について考えながら、生徒には『夏休みの課題を AI にやらせちゃだめだよ』と言わなくてはいいですね」という話になりました。

情報を得るとい点では生成系 AI と学校図書館は共通点があります。

今後、生成系 AI は加速度的にその精度を高め、人間が必要とする情報を瞬時に準備するだけでなく、このユーザーはこんな情報を求めるだろうという予測をしながら私たちの生活、行動に役立つとするでしょう。私たちが動かなくても勝手に予想して調べて教えてくれるのです。「しかし・・・」と思います。図書館に行けば、自分で考えて判断して行動するという一連の流れの中で必要な書籍を選択し、情報を入手したり想像の世界に入ったりします。選書に限らず、この一連の流れ(考えて判断して行動する)なくしては、人間は極めて怠惰な生活をする動物になりそうです。図書館は私たちが好むと好まざるとに関わらず、考える場、考えさせる時を提供してくれるのだと感じます。

これからの我が国を担っていく若い人々は、きっと生成系 AI を有効に活用して膨大な仕事を効率的、合理的に進めていくことでしょう。そんな人々が例えば電車の中で、「タブレットを読書する」のではなく、文庫本を手にして葉を挟みながらページをめくる姿を見て感動するときにそう遠くないような気がします。

今後、学校図書館にも DX 化の波が押し寄せてくることでしょう。生成系 AI は DX 化推進の重要なツールと言われています。人々の生活を利便性の高いものに変化させるのが DX の役割ですが、一方で人々の心をより豊かなものとし、考える場を与えてくれるのが図書館の役割と考えたいものです。

今年度、本学学校図書館運営専門委員会が、委託事業として文部科学省読書推進活動を行って 15 年目となりました。これまで御支援いただいた文科省、事業委員、本学関係者の皆様の御支援に厚く御礼申し上げます。特に、附属 12 校園においては、司書が司書教諭や一般教員と連携しながら日々の授業に役立つ様々な取組を実践していますが、校内での管理職、教職員の理解と協力なしにはこれを進めていくことは出来ません。改めて学校現場の皆様に御礼申し上げたいと思います。

令和5年度 学校図書館運営専門委員会関係名簿

所属	学校名	氏名	職名	運営専門 委員会	附属学校 図書館部会	司書部会
附属学校運営部		古家 眞	附属学校運営部運営参事 委員長	○	○	
附属学校課		佐藤 健一郎	附属学校課長	○		
附属 学校	幼稚園小金井園舎 幼稚園竹早園舎	栗林 万葉	教諭	○	○	
		田島 賢治	教諭			
	世田谷小学校	永田 光咲	教諭	○	○	
		梅田 翼	司書教諭	○	○	
	小金井小学校	金澤 磨樹子	司書	○	○	○
		西岡 里奈	司書教諭	○	○	
	竹早小学校	松岡 みどり	司書	○	○	○
		高須 みどり	担当教諭	○	○	
	大泉小学校	宮崎 伊豆美	司書	○	○	○
		山下 美香	司書教諭	○	○	
	世田谷中学校	富澤 佳恵子	司書	○	○	○
		阿部 由美	司書教諭	○	○	
	小金井中学校	村上 恭子	司書	○	○	○
		数井 千春	司書教諭	○	○	
	竹早中学校	長友 春陽	司書	○	○	○
		荻野 聡	司書教諭	○	○	
	国際中等教育学校	中村 誠子	司書	○	○	○
		野島 淳司	司書教諭	○	○	
	高等学校	渡邊 有理子	司書	○	○	○
		栞原 智美	司書教諭	○	○	
明田川 綾乃		司書教諭	○	○		
特別支援学校	岡田 和美	司書	○	○	○	
	野原 隆弘	司書教諭	○	○		
学術情報課 (大学図書館)	宮崎 伊豆美	司書 (竹小と兼務)	○	○	○	
	高橋 菜奈子	学術情報課長	○			
	瀬川 結美	学術情報課副課長	○			
事務担当	武田 邦宏	学術企画係長	○			
	須貝 英美子	副課長				
		金子 賢治	附属学校第一係長			

事業委員会・研究協力者一覧

〈事業委員会〉

氏名	所属・職名	備考
前田 稔	東京学芸大学 総合教育科学系 教授	図書館学・学校図書館
鎌田 和宏	帝京大学 教育学部 初等教育学科 教授	教育方法・情報リテラシー
野口 武悟	専修大学 文学部人文・ジャーナリズム学科 教授	図書館史・学校図書館
長谷川 優子	前埼玉県立久喜図書館 副館長 東京学芸大学非常勤講師	レファレンス・情報リテラシー
今井 福司	白百合女子大学 基礎教育センター 准教授	学校図書・図書館史

〈研究協力者〉

- * 浅石 卓真 南山大学准教授
- * 井谷 由紀 元東京学芸大学附属小金井中学校 学校司書
- * 片岡 則夫 清教学園中・高等学校 探究科教諭
- * 川上 佑美 東京学芸大学附属国際中等教育学校 理科教諭
- * 菊地 圭子 東京学芸大学附属竹早中学校 国語科教諭
- * きむらともお ハコブネ×ブックス主宰
- * 中山 美由紀 前東京学芸大学附属小金井小学校 学校司書 立教大学兼任講師
- * 橋本 健志 合資会社 風夢
- * 堀田 棕 東京学芸大学附属特別支援学校 初等科教諭
- * 宮田 諭志 成城学園初等学校 教諭
- * ムラタエイコ デザイン担当
- * 矢田 竣太郎 奈良先端科学技術大学院大学助教
- * 吉本 龍司 (株)カーリル 代表取締役
- * 渡邊 裕 東京学芸大学附属世田谷中学校 国語科教諭

(敬称略 五十音順)

令和5年度 文部科学省事業

読書推進活動事業

みんなで使おう！学校図書館 Vol.15

「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」報告集

編集 東京学芸大学 学校図書館運営専門委員会

発行日 令和6年3月

発行者 古家 眞

発行 東京学芸大学 附属学校運営部

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

『みんなで使おう！学校図書館』Vol.1～14は、東京学芸大学附属図書館HPリポジトリで読むことができます。



先生のための 学校図書館活用データベース

学校図書館活用DB 授業と学校図書館 読書・情報リテラシー 学校図書館の日常 テーマ別ブックリスト

今すぐ授業事例を探す ... 校種、教科・領域、学年を指定して授業実践を検索できます。

学校図書館は 新たな授業づくりを 応援します。

このサイトは文部科学省のプロジェクトとしてスタートしました。学校図書館を活用した授業実践をデータベース化しています。公開されている指導案、ワークシート、ブックリストを新たな授業にお役立ていただければ幸いです。



奈良教育大学附属中学校

もっと詳しく▶

当サイトの使い方

先生に
インタビュー

● 授業と学校図書館

使いこなす
情報のチカラ

● 読書・情報リテラシー

本の魅力を伝える
あれこれ

● 学校図書館の日常

使える
ブックリスト

● テーマ別ブックリスト

ちょこっと
アイデア玉手箱

● 図書のお役立ち情報

活かそう
司書のまなび

● 司書研修の報告

GAKUMOPAC
東京学芸大学学校図書館の未来を拓く

BookReach

授業事例を
大募集!!

お知らせ

今年も、12月16日(土)午後1時より5時までの日程で、文科省事業報告会 **みんなで使おう! 学校図書館Vol.15**をオンラインで開催します。申し込みは[こちら](#)からどうぞ。Zoom URLは後日送られます。尚、当日のプログラム詳細は、学校図書館の日常 [トピックス](#) をご覧ください。

令和4年度文科省事業報告会「みんなで使おう! 学校図書館 Vol14」→[録画視聴申し込みフォーム](#) 視聴されたかたは、ぜひ [アンケート](#) にご協力お願いします。

2020年11月5日に、「学校図書館の検索のイマ! Part2」に参加しました。現在録画配信→ [こちら](#)。

新しいサイトになりました!

2024.3

